

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第八十五卷「芸術、文化、言語、文学（二の五）」

人工言語、国際言語、国家内共同体言語の現状とその危険性および有用性

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第八十五巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、人工言語、国際言語、国家内共同体言語の現状とその危険性および有用性に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第三編 三十歳～三十九歳

伊勢原女性切りつけ事件についての岩崎式日本語（岩崎式言語体系）関係者の議論

関根ひかり×岩崎純一 トーク・イベント（全四回）のお知らせ

関根ひかり×岩崎純一 トーク・イベント（全四回）の御礼
関根ひかり×岩崎純一 トーク・イベント（全四回）

岩崎純一による発表部分の文字記録

四月二日・九日の発表の文字記録、配付資料を掲載しました

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

第三編 三十歳〜三十九歳

伊勢原女性切りつけ事件についての岩崎式日本語（岩崎式言語体系）
関係者の議論

二〇一三年十二月二十七日 起筆

二〇一七年二月八日 公開

二〇一七年二月二十二日 最終更新

編集：岩崎式日本語研究会（DV・犯罪被害女性一同、岩崎純一）
公開：岩崎純一（全ての方々より公開の許可が得られたため、公開）

以下は、標記の事件の発生にあたって行われた、岩崎式日本語の制作者（岩崎）および学習者・使用者（DVシエルター・被害女性専用施設に入所の女性や発達障害男性）による議論です。

岩崎式日本語で書かれた部分、手書きで書かれた部分も、全て現代日本語で入力してあります。この事件で被害に遭われた女性と同様、DVシエルターや被害女性専用施設で暮らす不安障害、PTSD、解離性障害などの女性たちの意見として、ご参照下さい。

二〇一三／五／二六

【A】 最近テレビでやってる伊勢原の女性切りつけ事件の容疑者ですが、岩崎さんと交流のある人工言語の作者じゃないですか？

【岩崎】 調べてきますので、少々お待ち下さい。最近はあまり交流がなかったのですけれど。

【A】 確定みたいです。

【岩崎】 ありがとうございます。今確認しました。残念ながら、そうですね。私は、人工言語界の動向にはアンテナは張っています。ど真ん中にいらっしやる作者の方々と比べて情報入手が遅いです。最近はあまり交流がないですし、大きな影響、というより何の影響もないと予想します。

二〇一三／五／二七

【B】 今知りました。言語上は関係ないかもしれませんが、DVストーリーカーの人工言語作者が元妻を探し出して切りつけたとなると、私たちに関係があるのですけど。そんな淡泊に流されたのでは、なんとなく不安なのですけど。

【岩崎】 あまりそういう情報は追わないほうがいいですし、追うと精神的に傷つきますよ。同じような境遇になった被害女性のことを心から思うだけで、皆さんの役割は十分だと思いますよ。

【B】 岩崎さんの言語活動は元妻さんみたいな人たちをかばう側の立場だし、ちよつとでも交流があるなら、ちゃんと追っておいた

ほうが……。私たちもこういうDV加害者から追われてる立場ですよ。

【A】 同感です。何かのメッセージは出したほうがいいかなと感じます。

【岩崎】 了解です。考えます。

二〇一三／五／二八

【A】 テレビやネットでは、容疑者の顔とか、自作言語の短編映画、文字、自作の技がさらされて笑い物になってるのですが……。コメントーターとか評論家とかエスペラント関係者によるリンチ状態です。

【B】 容疑者が「全ての元凶は妻が出て行き、無視し続けたことにある」と言ってる、反省してないから、しばらくはリンチ状態になりそうな気がします。

【岩崎】 割と早く収束しそうな気はしますが。こういう言い方は失礼かもしれませんが、人工言語が、単なるサブカルチャーでなく、本物の言語学的知識がないとさっぱり意味の分からない学問分野だとメディアが知る羽目になるだけだと思いますよ。容疑者の言語以外の作者の言語も含めて、メディアが扱うには高度に学問的すぎる分野だと思います。

今回の被害女性は、この容疑者が大学で人工言語をやって孤立し、言語学の教授や友人たちから嘲笑されていたときに、容疑者を認めた数少ない人物であり、結婚された人なのです。人工言語を作ると

いうのは、大学での学業や就職や労働といったものと別の次元、あるいはそれ以上の高度な頭脳と体力とを使う重労働ですから。

メディアの能力では、謎の動画を放映して笑うのが関の山だろうし、そのうち人工言語界隈の話について行けずに手を引くのを、我々が眺める結果になると思いますよ。

【A】 元妻さんの意識が回復したようです！

【岩崎】 安心しました。

【B】 まずは一安心。でもこれからがきついのですよ。フラッシュバックは一生ものだから。それに、お子さんへの影響が心配です。

二〇一三／五／二九

【C】 今日ネット上でいろいろと読んでしまい、傷つきました……。こういうシェルターとか避難施設って、普通に探偵が探し当てられるものなのかな？

【B】 被害女性のいるシェルターじゃなくて、家を探し当てての犯行みたいですよ。私たちがみたいなどころから出て、同じようなところに入所するまでの空白期を狙ったってことじゃないですか？

【C】 あ、そうですね、シェルターじゃなくて路上でしたね。

【岩崎】 ネット上の情報は私が拾ってきますから、皆さんはあまり読まないほうがいいかもしれません。どうしても読むなら、気分と体調と天気の良い日に複数人で読んだほうがいいですよ。こんな形で影響を受けると、心も体も壊すかもしれませんので、お気を付け下さいね。

【A】 とりあえず、私はネットOKな身なので、拾ってきます。

【岩崎】 人工言語や言語学と関係付けなければ、そのうち自動的に終わる話だと思うのですが、様子を見ます。こういうときに、偏見のない言語学者がテレビに登場して、碩学を見せつけ、人工言語学の意義を示してコメンテーターを押さえなければよいのですが。

とは思って見たものの、日本のメディアはそうはならないですね。もちろん、テレビだと視覚的に笑いのネタにしやすいから、ここぞとばかりに短編映画を流していますが、新聞では大したことなさそうですよ。

【C】 言ってみれば、人工言語作者とそれを支える人たちという、まあわたしらと同じ構図で、どうして作者から殺そうという気になったか知りたい。ええ、まあ、元妻じゃなくて、一支援女性ですが……

【B】 被害女性は長年アルカ全般に協力、アルカで生活もすれば愛も語る。リアル世界、ファンタジー世界を含めた色んな女性や子供、人工言語マニアの皆さんに囲まれた、容疑者を中心とする、アルカ文明の立役者。でもだんだん、作者からのDVが激しくなると、耐えきれず離婚し、シェルターに避難。コンタクトを取ろうとするも、何年も無視される。支えを失った恨みから犯行。だと読み取りました。

二〇一三／五／三〇

【岩崎】 もうメディアもやり尽くしたようで、これ以降、短編映画などの集中放映はない気がするのですが、それなりにテレビや週

刊誌、ウェブマガジンから取材依頼が来てしまったから、対応は考えます。とりあえず、方針転換です。

【A】 来ましたか……

【岩崎】 こちらとしても、放置・傍観作戦は撤回かなとは思いますが、ほかの人工言語作者さんは、事件関連の議論は続けていますが、取材が来たような話はないですね。これも、いつもの理由だと思いますが。

【C】 どうして岩崎さんに取材が集中するのですか？

【岩崎】 おそらく、条件が全部そろっているからでしょうね。

実名で人工言語を制作して公開したり、大学の授業でも触れたりしていますし。それに、DV被害女性が使用者にいるし、精神病理学を大々的にサイトで扱っているからだと思います。取材に対して、常識内で、優等生的に応答してくれそうな（容疑者を批判してくれそうな）社会性が確認できた人物だと思われたのだと思います。2ちゃんねる（ネット掲示板）もやらないですし。

人工言語作者は普通、この容疑者と同じくファンタジックなアニメキャラクターのような名前を自分で自分に付けて活動しているの、岩崎という正統派の学者がほかのオタク系人工言語（容疑者の言語含む）を叩くという方向性にしたいようです。

もちろん、全部断っていますよ。確かに、サブカルチャー系、容疑者の言語界限とあまり縁がなくて、やや孤立気味の実名社会人作者という点では、私は、ノシロ語の水田扇太郎氏や、地球語のマークファーランド・佳子氏の精神性に近いのかもしれないし、国際補助

語も目指していませんが、サブカルチャー系人工言語世界にも親し
みを感じますから。

あとは、容疑者と年齢が一緒だからでしょう。学年は違つて、容
疑者が八三年生まれ、こちらが八二年生まれで、「キレル世代」と呼
ばれたのは私の八二年生まれですけれどね。誕生日がわずか二ヶ月
違いだし、たぶん日本の人工言語作者の中で、私が一番容疑者に近
いですね。

今回の容疑者の犯行も、我々八二年前後生まれが起こしてきた凶
悪犯罪のよくある型だと感じます。私を含めた時代の異端児を巣く
っている心境が起こしたものだと思えますから、それを非難する力
は日本のメディアにはないと思います。

【B】 学習院大出身のDVストーカー言語作者を、東大のまっ
うな言語学者が斬る、みたいな、安直な考えでいけると思ったのか
な。アルカとかナントカとかのファンタジーよりは、「岩崎式」とあ
ると、名前のイメージだけでカッコリしていて、信用ありそうだと
思うのかもしれないね。

【岩崎】 私は全然まっとうではないですが・・・。そもそも、東
大を中退して人工言語をやっている時点で、東大言語学から見れば
アウトサイダーであるわけで、下手をすれば職を失う可能性さえあ
るし、それだけの覚悟は必要だと感じますね。

私は、大学にいた頃は、ニーチェ哲学や仏教哲学がメインで、言
語学はその後だったから、かなりズレますけれど。容疑者の孤立無
援の孤独だけは、共感するところがずっとありましたから。

東大の言語学学閥もある程度は見てきた身ですが、私から見れば、
今の日本のサブカルチャー人工言語界隈を担う高校生や中学生、工
学系・コンピュータ系の専門学校のほうが、発想や創造力だけで
なく、言語学のレベルも上ですからね。容疑者は、東大や東京外大
や学習院大の言語学があまりにも大したことがないので、人工言語
革命を起こす、という思想、ひいては世界を変革するという思想に
至ったと思います。

日本の職人技はこういうところにも出ていて、人工言語を作ると
いうのは、言語学、文化人類学、社会学、文明論、昨今の劣悪労働・
ひきこもり・ニート問題、生物学、解剖学などを網羅的に勉強して
いる人間にしかできないのです。

容疑者の言語の使用者たちにも、高学歴のニートや異端児の男性
がいて、ほぼ私と同じ世代なのですが、容疑者も含め、「高学歴なの
に、人工言語に没頭する人生なんてもつたいたい」と散々言われた
みたいですよ。

私も、「東大を中退して、言語を作るとか、音に色が見える共感覚
があるとか、どういふ障害ですか？」と言われたことがあります。
健康な男なら、瞬間的にはよろしくない怒りや発想が本能的に浮か
ぶのです。ただ、そういった批判をバネにしてあの自作言語体系を
創り上げた容疑者の努力は、驚嘆に値すると思ってきました。

そもそも、大学の利益や定員割れと日々向き合っているナントカ
大学の言語学学閥や、視聴率狙いのメディアが出る幕ではないです。
取材が来たところで、それを言っただけ、はい、終わり、となる気がし

ます。

【A】 岩崎さんは容疑者を擁護しているわけでないことはもちろん知ってますけど、なんとなく似てるな、とは感じます。

【岩崎】 それは自分でもそう思いますよ。容疑者の世界観、歴史観、言語観、労働観、女性観・・・色々と拝読してきて、例えば、女性専用車両やレイディス・デーについての考察や見解などは、私と似ていますからね。

しかし、それだけに、安易なフェミニズムの打倒、選挙への出馬、政権打倒、自衛隊決起、政治・宗教団体の設立などの壮大な理論と実践に進まずに、一人の女性への襲撃という方向に走ったのは、滑稽というか、どうも納得がいきません。ヒトラーの『我が闘争』を読んでいながら元妻への襲撃で終わるのでは、やはり理論破綻と思われるも仕方がないと思いますよ。ナチス党員たちのゲルマン女性への愛と優しさは、むしろ尋常ではなかったですから。

それでも私は、西洋思想ではニーチェを最も尊敬しますね。ニーチェ哲学は、人を殺さず、人をただ生かし、実存させるのです。今回の容疑者なら、ニーチェよりもヒトラーを好むことは目に見えています。

【C】 むずかしい・・・。それにしても、テレビ。セレン・アルバザードとかルシフェルとか、全部放映しちゃうんですね。日本の人工言語の評判はおしまいなのかな・・・。

【岩崎】 正確には、日本の「人工言語学」が、欧米のように正統の学会になったり大学の学科コースになったりする道はほぼ絶たれ

た、ということでしょうね。大学のとても偉い諸先生方は、お茶を吹き出して終わりだと思えます。人工言語学を現行の学校教育法や教育基本法の枠組に無理矢理入れようとするなら、工学系・コンピュータ系の専門学校のほうが期待できる気がします。

【A】 メディアや大学の言語学のレベル自体が容疑者のことを強く言えないレベルだとは思いますが、なにしろ元妻さんがかわいそうだし、もし元妻さんがここに来たと仮定したとき（全国いろんなシェルターや女性寮があるから、まず来ないと思うけど）、岩崎式言語や岩崎さんの思想はその傷を受け入れる世界観なわけで、あまり交流がないといっても、こういう人工言語作者による犯罪に断固反対という意思表示は、創作家としてどこかにあったほうがいいと思いますけど。

【C】 岩崎さんがヘンにサブカル系に巻き込まれない程度にお願いします。

【岩崎】 そうですよ。何だか、ものすごく変な巻き込まれ方になってきましたね・・・。考えます。なるほど、私の人工言語はこういう形でこの事件に関係するのか、と自分で知った気分です。これはいったい何なのだろうか・・・。謎の気分ですね。

【B】 とりあえず、犯人がやっている人工言語学研究会を脱会しますというのが、効果ありそう。

【岩崎】 あの学会は、他の人工言語がほぼアルカに従属する形でのスタイルと私は思っていて、会の運営自体が容疑者の専権事項だと思っ

チャーター人工言語界限の高校生たちとも接点を持つ楽しさのために）入会、というより登録してみたのです。これも放置でいいかと思いましたが、考えます。

二〇一三／五／三一

【B】 アルカの協力者までもが、ニュースで犯人の自作のルシアン動画が流れたのを見てお茶の間で家族で大爆笑したとブログにありました。岩崎さんが人工言語のために何かメッセージを発信する意味はあると思います。

【C】 さすがにこれは、とぼちちりが来るはずですね。

【岩崎】 元から、人工言語全体がほとんどの日本国民にとっての大爆笑ネタというのが現実だと思いますよ。日本では、「人工言語」イコール「サブカルチャー、オタク、犯罪者予備軍、妄想性障害、精神異常、アスペルガー、発達障害、社会不適応」という扱いだから、一度でもこんなことで有名になったら、国民的大爆笑だと思います。

そもそも、人工言語を作っていることが同僚や知人に知られただけで社会的地位や人間関係が危うくなるレベルなのが、日本ですからね。人工言語が禁止された悪夢の時期を乗り越えた西洋諸国で、今や人工言語学会があったり大学で人工言語学コースがあったり、発達障害者やサヴァン症候群の人たちが飛び級で生き生きと勉強できるとは、わけが違います。

日本で社会人になってからも人工言語を続けようとするなら、開

き直ってウェブサイトで公開する勇氣と精神力がないと、務まる任務ではないですね。ある意味、家に閉じ籠もって人工言語を作ったり語ったりしている人たちは、営利企業・会社に就職して上司や得意先にペコペコ頭を下げて回るような価値観ではやっていないと思います。

自分という人材を社会に売り込めるとか、自分の労働価値がひいては職場の利益や国益になるといった価値観から超然とし、そういう小手先の榮譽を度外視して、創作への衝動と絶対的な孤高さを体得している人にこそ成せる、貴重な営為なのです。

【A】 岩崎さんがお名前を出して人工言語を作っていること自体が、貴重というか、危ない橋を渡る勇氣なのですね。

【B】 そこまでは、岩崎さんだって犯人の思想に近いのに、なんぞって状況ですよ。

【C】 元妻さんもストレス障害やPTSDばいですね。わたしみたいにできれば解離しないで頑張っていただけだと思いますけど。

【岩崎】 こういうときに解離するかどうかは、ある程度遺伝や生育環境、人生で出会った人々の影響によりますからね。心の居場所、逃亡先が皆無である場合に、残された最終手段として、自我を改変、分裂させるということでしょうね。

【A】 Cさんもお大事に。

【C】 ありがとうございます。つらいけど、最近わたしも大丈夫です。

【岩崎】 震災、殺傷事件などのニュースを見て、一番影響されて

しまい、フラッシュバックなどで苦しむのは、PTSDの人が多くです。自我がそのままの状態で被害や被害の目撃に耐えるのは、一番苦しいのです。

解離性同一性障害の場合、解離癖が付いて、数十人の人格を生み出すことがあるから、どれかの人格が強靱な精神力を持っていれば、そこに苦痛の記憶を押しつけて格納してしまうから、死に迫る苦しみは免れるのです。あまり何も考えずにポンポン人格を分裂させるから、本当はかなり良くない癖なのです。

ともかく、自分がかつて協力した人工言語の作者から刺されるなんて、致命的な心身のダメージです。矛盾なく受け答えされている時点で、解離系ではなく、ストレス障害、PTSD系だから、むしろ想像を絶する苦しみだと思います。

二〇一三／六／一

【A】 岩崎さんには、これからも「人工言語を作っている事実、文法解説、言語の成り行きはウェブ公開するけど、例文（とくに私たちの日記とか被害記録）は載せない」というスタンスは守ってほしいです。

【C】 探偵っていつでも、被害女性はどうやって居場所を割り出されたのですか？

【B】 知らないけど、岩崎式日本語で書いた自筆の日記とかは、載せると筆跡でばれるパターンになるから、載せられないですよ。

【岩崎】 色々考えています。皆さんも、携帯やスマホは没収され

ている、というより施設に預けているパターンが多いと思いますが、手書きでなくて、電子データでの継続的な記録は難しいのですか？

【C】 できないわけじゃないですけど、解離性障害やPTSD特有の被害体験の偽造を防ぐため、書き手をはっきりさせるために、手書きがすすめられています。虚偽記憶ってやつが起きないためにです。手書きじゃないと、どの自我や人格が書いたのか思い出せなくなって、治りも遅くなるので。

【岩崎】 私のほうでは、預かった日記や被害記録はなるべく電子化しておきますね。

【C】 あー、結局どんなに逃げ回っても、追い回されるのね・・・涙

【岩崎】 論点を整理すると、まず皆さんは、元夫や元恋人への一般的な抵抗策（法律に基づく加害者への訴訟や、加害者に対する監視カメラの設置といったハードな抵抗）とは別に、岩崎式日本語という人工言語による秘密の被害記録というソフト策で対抗してみているわけです。

しかし、今回の事件は、例えて言うなら私（岩崎）が皆さんを殺そうとしたという、私にとっては意味不明な構図だから、そんな事件はあり得ないという意味では、そもそも何でもないし、放置と傍観でよいわけです。ただし、同じ人工言語の作家という意味では、去る者に鉄剣を持って襲いかかるか否かが作者人生のどこで決定されるのだろうかという哲学的側面は、私の関心上、知りたいです。

【A】 むしろ、みんなが心配なのは、私たちに秘密の人工言語を

供給している岩崎さんに対する、私たちの元夫や元恋人からの報復
なのではないでしょうか？

【C】 答え出た。それ。それが言いたかったです。

【B】 本当に、論点を整理しないと、自分たちが何に動揺してい
るのかさえわからなくなる事件ですね。

【岩崎】 とてもありがたい心配のされ方で、感謝しかないですが、
それにしても、報復と言ったって、さっきも書きましたけれど、言
語学、文化人類学、社会学、文明論、昨今の劣悪労働・ひきこもり・
ニート問題、生物学、解剖学などを網羅的に勉強している人間にし
か到達できないこの人工言語の世界を、加害者が壊そうとしたとこ
ろで、どうやって壊すのでしょうかね。

紙一重ではあるけれども、どこかで生きている土俵、乗っている
時空間が違うわけですからね。広軌鉄道のレールに狭軌鉄道の車両
で乗りかかっても、乗ったほうが壊れるだけですよ。

メディアでさえ、言語学的な論理性をもって殺人未遂事件の容疑
者を正しく叩けず、人工言語と動画を編集して勝手に放映しておい
て、責任も取らないのに、DV加害者が元妻などに人工言語の壁を
乗り越えて近づこうなんて、非常に軽々しい知性だと私は思います。
私の強がりも入っているかもしれませんが、乗りかかっても来て大
したことはないと考えますよ。

ある意味では、岩崎式日本語を、DV加害者から「恐怖言語」と
恐れられる言語にしたいくらいですよ。加害者の鉄剣や戦争・紛争
に対して、法や人権や監視カメラや戦闘行為で「反撃」するのは

別に、頭脳と芸術言語のパワーで打倒・打開したいと、私は個人的
には思うのですよね。

本当の「人間力」が試される時代と社会になったと、私自身は思
っているのです。世界中で起きている人間のひずみが、日本国にお
いてはDV、パワハラ、セクハラ、児童虐待、過労自殺、高齢者の
傲慢問題などとして現れ出るので。

【A】 岩崎さんは、容疑者にギリギリのところまで似ているのに、
やっぱり根本的に違う気がするのですよね。

【C】 整理。アルカの作者は、女性使用者・協力者を殺そうとし
た人。岩崎さんは、そういう女性使用者・協力者のショック症状、
PTSDなどを研究して文法にする人。はい、できました。

二〇一三／六／二

【B】 私たちのものにも、こんな感じで探偵を使ってきたりする
可能性があるってことが示されたわけだから、日本語、英語、岩崎
式に限らず、文字を書いたものを持って外出ができない気分ですね。

【C】 犯人はADHD、自己愛性パーソナリティー障害かアスペル
ガーだという議論があるようです。岩崎さんはどう思いますか？

【岩崎】 こういうケースは、長年の経験ですぐ分かるものですが、
ノーコメントでお願いします。

【A】 それにしても、岩崎さん、実名で人工言語、精神病理学な
どをドンピシャで扱っていたのが、地雷でしたね。

【岩崎】 こういうときに重要なのは、日本のメディアの暴走、精

神異常者叩きから、本当に真面目に人生を送っている正真正銘の ADHD や発達障害の人たち、子供たちを守ることに、です。

【A】 ハピズムというウェブで事件についての連載を見つけたが、魔術師による中二病言語の批判という設定で、オカルト系に分類されていました。人工言語作者たちは、今回の犯罪と言語とを一緒にするなどメディアに怒っていますね。

【岩崎】 ハピズムは聞いたことはありませんが、運営会社を調べたらサイゾー系だった・・・。サイゾー系メディアは、オカルトだろうが政治だろうが、そういう路線「しか」ないですから。さては、このルートからも私に取材依頼が来たのかもしれませんが。メールは、ライターの方々ご本人から来たわけですが。

【C】 私は、ちょっと心理的なこともあるので、なるべく追わないようにしますね。

【岩崎】 そのほうがいいでしょうね。こちらとしてもだんだん困ってきたから、どうしても事件と人工言語と一緒に扱わざるを得ないですね。今日、人工言語掲示板のほうに、人工言語学研究会からの退会依頼を出しておきました。以下の通りです。

【B】 すごくわざとらしい書き方の気がしましたが（笑）、ひとまず安堵しました。

【A】 何も知らなかったことになっていますが、まあそれでいいのではないのでしょうか。ありがとうございます。

【岩崎】 人工言語界限との縁を切るのが目的ではないですからね。今回の事件がやはりこちらとしては迷惑だったことを伝えること、

容疑者主催の研究会とのリンクが外れること、私の人工言語は元妻さんのようなDV被害者たちの保護を目的としているが、こちらとしてはお構いなしにこの路線を続けますからねと示すこと、などが目的です。

【C】 ありがとうございます。

●以下、人工言語掲示板より引用

186 : 純一 : 2013/06/02(日) 15:34:09

こんにちは。

岩崎式日本語の作者です。

本日、何も存じ上げない状況でミリ語のスレッドに書き込みをさせていたから、

こちらの掲示板を色々と拝読いたしまして、なぜ最近（私の言語を含めた）人工言語全般を非難する内容のメールが

多く来るのかを、何となく理解しました。

（ただし、判断に誤りがあれば申し訳ございません。）

皆様のところにも来ているのかもしれませんが、

私の言語は、ちょうど共感覚や精神疾患といった特殊な知覚・精神様態そのもの、

そしてそれらの罹患者との出会いを契機として制作している言語であることが、
世間一般の評判に直接的に影響したと考えています。

先月後半は、そのような波及の意味も分からず、
正直なところ、しんどい思いをしておりますが、
一番申し上げたいのは、人工言語・芸術言語そのものは
人類の文化・文明にとって今後に必要な営為だと思いうことで
す。

ただ、私の言語の性質そのもの、
そして、少数ながらおります私の言語の話者のことも考え、
人工言語学研究会を脱退させていただこうかと考えております。

もし現時点で私の判断（色々な情報から予測したこと）に大きなミスがあれば、
お詫び申し上げなければなりません、
ともかく、話者に含まれるADHD者や解離性障害者への影響を食い止めた、
どのような手続きを取れば脱退できるかをお教えいただければ幸いです。

187 : luni ◆CcpqMqdg0A : 2013/06/02(日) 15:47:30

VV186

ええと、まず、その研究会の入会手続きについてがよくわからないんだけど、

今回の事件に対する岩崎式日本語への影響を弱めるとなると、
masさんに頼んでミラーサイトのリンク一覧のところから外すとか、
そういう手順になるのかな。

研究会そのものと言うと、その一番偉い人が逮捕されて、連絡も
使えないし、

他のメンバーは海外の人らしく連絡が付かないし、手続きについては把握していないのです。

188 : luni ◆CcpqMqdg0A : 2013/06/02(日) 15:50:06

うちのセレンさんがご迷惑をおかけして大変申し訳ありませんでした。

189 : FAFS : 2013/06/02(日) 16:07:59

セレン氏の事件と人工言語は直接関係ないのにまだ喚いてる奴がいたのか…

190 : 純一 : 2013/06/02(日) 16:17:52

ありがとうございます。
承知いたしました。

リンクの削除は可能でも、脱退そのものについては不明ということですね。

では、現在のサイト管理者様のご判断にお任せしたいと思います。
代表者に無断で消せないということでしたら、とりあえずそれでも結構です。

191 : 名無しさん : 2013/06/02(日) 17:04:42

これはまた水田クラスのとんでもない有名人が来てるな

192 : 名無しさん : 2013/06/02(日) 17:38:39

事件に関係のない人間が、関係ありそうな個人やグループを誹謗中傷する。

事件という大義名分を掲げて、自分のやっってること正当化してるつもりだろうけど

「なんかキモい」とか「同類」とかで括りつけて、
集団で虐めてんのかなにも変わんねーよ。

193 : nias : 2013/06/02(日) 18:37:23

>>190

ミラー管理者のものです。

ミラーからリンクを消しておきました。

私自身は人工言語研究会に関し何ら権限を持っておりませんので
脱会については不明ですがご了承ください。

194 : Iuni ◆CcpqMQd0A : 2013/06/02(日) 19:03:42

niasさん、いつもすまないのです。・H・

195 : 純一 : 2013/06/02(日) 19:23:34

nias様

ありがとうございます。

お手数おかけいたしました。

個人的な問題に対処していただき、恐縮です。

産経新聞 6月13日(木)12時16分配信

神奈川県伊勢原市の路上で女性(31)が元夫の貞莉詩門(さだかり・しもん)容疑者(32)に殺人未遂容疑で逮捕に刃物で切りつけられ、一時意識不明の重体となった事件をめぐって県警伊勢原署の男性警部補(49)が上司に虚偽報告をしていた問題などを受け、県警は13日、ドメスティックバイオレンス(DV)の担当者らを集めて臨時会議を開いた。

会議には、県内各署でDV相談などを受ける担当者や本部の生活安全部門の幹部ら約280人が出席。冒頭で、石川正一郎本部長は「児童や女性や高齢者など自らを暴力から守る術を持たない人々を守ることは県警の最も重要な使命。伊勢原事件の教訓を踏まえた一層の奮起をお願いする」と訓示した。

また、県民を守るために自ら努力を尽くすとともに部下や上司にも義務を誠実に果たすことを求めること▽危険を予知する鋭敏な感覚を研ぎ澄ますこと▽自らの行動を正確に振り返り、反省点や教訓事項を率直に受け入れて向上に役立てること―などを指示した。

事件をめぐっては、伊勢原署生活安全課の男性警部補が「注意喚起するために女性に電話をかけた」と上司に虚偽報告。さらに、カメラが取り付けられた自転車が女性宅敷地内で見つかり、女性が貞荊容疑者の関与を疑ったが、同署地域課の警部補（40）が報告書に記載していなかったことが明らかになっている。

二〇一三／六／一四

【A】 どうやら警察の対応に問題ありのようです。

【岩崎】 これは、防ぐことができたかもしれない事件ですね。

【B】 ほかの人工言語作者のみなさまは、犯罪は人工言語と関係ないと言うけど、こういう犯人に対して岩崎式日本語はどうあるべきか考えたいです。

【D】 すみません、今さらこの事件を知りましたので、あしあと

残します。

【C】 岩崎さんは、犯人とどんな交流があったのですか？

【岩崎】 世界の民族語の色彩語彙の話、サピア・ウォーフの仮説の話、ソシュールやチョムスキーの話、翻訳の話などをしましたね。少なくとも、東大の言語学の先生方と話しているよりは面白かったです。残念です。

二〇一三／六／一五

【A】 犯行の前から被害者宅前に不審な自転車があったとのニュースです。探偵が自転車に隠しカメラを設置していたようです。被害者がどう逃げ回っても、警察がなんとかしないとどうしようもないケースです。

【B】 人生のある時期に愛し、その作品にまで協力し、共に会話を交わした相手から、DVを受け、殺されそうになるとはね。

【D】 わたしも終わりだわ。

【B】 それはいいです。大げさすぎです。気を強く持つて下さい。嘘でもいいから楽しく生きてると、DV被害女性は寿命が延びますよ、これほんとはです。

【A】 思いきり走る、声を出す、お笑いを見る、なども効果ありますよ。

【C】 探偵ルートって、どんなのがあるの？

【A】 どこからでも調べてきますよ。

【E】 岩崎さん、大変そうですね。応援しています。発達障害の

男性はあまり関係なさそうというか、今回は犯人側になってしまった例だから、同じ目にあつた女性のみなさんご意見を眺めるだけにします。

【岩崎】 Eさん、ありがとうございます。容疑者が発達障害かどうかは分からないし、人工言語界限では自己愛性や反社会性のパーソナリティー障害であるという見解が多いですよ。ただ、そこは免許を持った精神科医が診るべきところですが。

一つ言っておくと、発達障害の男性の犯罪率は、定型発達者男性と変わらないか、むしろ低いくらいですよ。それに、人工言語を作っている人は、ほとんどが男性なのですが、発達障害の人が多いと思います。世界的に見てもそうで、私はアスペルガーや高機能自閉症にさえ当てはまらないと言われていたのですが、似た傾向はありますし、私の持っている共感覚や直観像記憶、不思議の国のアリス症候群といった知覚現象・知覚症状を持っている人は、人工言語・人工世界の作家には多いですよ。

むしろ、パーソナリティー障害のB群（劇場型）である自己愛性や反社会性の人は、少ない気がしますね。いくら人工言語や人工世界の中で、革命や殺人を描いていても、現実に女性を襲撃するなどという人工言語作者は、初めて見ましたよ。この事件自体が、容疑者が書いたどんなアルカの作品よりもあり得ないファンタジーに感じますよ。

【E】 なるほど、そうなんです。安心しました。自分は発達障害の中でも消極的なほうなので、皆さんの言語を作る活力がすごい

など思いました。まあ、しばらくは傍観しています。

【D】 大げさかもしれないけど、わいせつとかセクハラとかきつい被害なのですか。

【B】 えっと、それで？ 自分も終わりだとか、楽しく生きられないとか、かな？

【D】 昔は好んで協力した相手という時点で、少しうらやましいとか、おあいこみたいな発想になりがちだから、またそこで自分を責めるし、気持ちが悪くなります。いきなりの犯罪とは違うでしょう。

【B】 とりあえずここは、責任は100%加害男性にあり、という扱いにしないと・・・。

【岩崎】 つまりは、そのあたりにこそ私は関心を抱いていて、たぶん私が探究すべき分野なのです。あらゆるものを犠牲にして多大な労力を言語創作に費やしてきた容疑者の人生を見ると、批判一辺倒のみでよいのか、どんどん分からなくなりますよ。容疑者側にも一定の道理があるのか、といった哲学上の問題ですね。

そして、神はそれをどう見たか・・・。アルベール・カミュは、殺人者、殺人未遂者のような重大犯罪者の過ちを追求しようとしても、「善も悪も正解も間違いもないという不条理」がただそこに横たわっていることしか発見されない、ということを示しました。

それから、必ず出る議論が、DVストーカーから逃亡するときややっていい手法とやってはいけない手法というのが随分と確立してきている中、被害者がそれをちゃんとやっていたか、など。

しかし、日本史上、最大規模かつ最高の完成度を誇る人工言語作者の男が、協力者の元妻をこの世から消そうとした事実は消えませんが。今回の被害者は、できる対策は何でもやっていたようです。ここは法治国家ですから、それ相応の鉄槌が容疑者に下されるものと思いますよ。

【D】 ごめんなさい。

【A】 Dさんの気持ちもわかりますね。

【岩崎】 Dさんの気持ちも理解できますね。

二〇一三／一二／二一

【A】 伊勢原の事件、懲役12年で確定のようですね。

【岩崎】 求刑が18年ですか。後遺症が激しく、心理状態も大変だから、感覚的にはそれくらいかなと思いました。被害女性にとっては、それでも全然足りないと思います。

【A】 元妻さんの言葉の引用です。

「この事件によって、負うことになった体と心の傷については、半年以上たった今でも受け止めきれない状態です。判決は懲役十二年と聞きました。判決の理由では、わたしの処罰感情も考慮されていましたが、十二年は短いと感じています。加害者から再び、危害を加えられるのではという不安でいっぱいです」

(二〇一三／一二／五 FNNニュース)

【C】 自分で人工言語を作っておいて、女性を取り込んでおきながら襲撃して、日本の人工言語の評判を落とすって、ふざけているとしか。(激怒)

【岩崎】 これまで三十年の人生の中で、特にサイトを始めて以降、私は何十人もDV・暴行・虐待被害女性を見てきて、自分のほうが頭がおかしくなるくらい悩んだこともあり、それが自分の宿命だと思ふに至り、そういう現代の問題を、自分が没頭できる人工言語(私自身の制作言語)や共感覚の世界を軸に打破しようとしてきました。

しかし、最も期待し、交流もあつた当の日本の人工言語界の有名な人が、そういう被害者をこの世から実力で排除しようとする以上、もはや私が日本の人工言語界で無理をしてやるべき仕事はなくなつたのだろう、とは感じます。

だからといって、人工言語自体の意義に関するメディアの報道の質には、今後も期待はしていません。

それから、女性の人権保護を標榜するNPO法人や公益法人の女性スタッフの方々とも面識は持つてきましたが、多くの場合、こういった人たちにとつての最大の恐怖は、逆に世の中からDV・暴行・虐待被害に遭う女性たちや、性風俗業に就業する女性たちがいなくなる事なのだ、ひしひしと感じてきました。世の弱者女性たちが被害に遭い続けてくれることで、初めて自分たちの人権運動の口実と自信とが担保できるといふ、最大のルサンチマン(弱者道徳)が機能しているのを見ってきました。中には、男性という存在自体が

嫌いな団体も多くありますしね。

【D】 これらは、意図的に手を抜いた人権運動（戦闘行為）と言えると思いますけれど、私の人工言語活動は、手を抜かない知的活動でありたいということは思います。

【E】 私も、ひきこもり・ニートのオフ会で NPO 団体の女性たちとお話したことがあります。かなり好戦的な人が多くて、自分たち発達障害の男性からすると、手が出せない感じですが、傷つきました。

【岩崎】 お気持ちは分かりますね。心優しくて、人の気持ちについて考え込んでしまう、対人関係にまじめな発達障害、アスペルガーの男性が、一番苦手とする女性たちだと思えますよ。発達障害者が人の気持ちを分らないというこれまでの医学における言説自体が、怪しいと私は思っています。

【E】 人にもよると思いますが、発達障害どうしの男性だと、わりと気が合う気がしていますね。

【岩崎】 そういうケースはよくありますね。

【C】 この被害女性にお会いしてお話したい気持ちです。フラッシュバックのおさえ方とか。

【A】 犯人が出てきたら、またシェルターか避難施設を転々とすることになると思うから、人工言語関係で被害女性と関わろうとするなら、最大でも十二年以内ですけれど、残念ながらそれはやめましょうよ。

【C】 やっぱ無理かな。

【D】 逃げ回ってもどっちみち見つかったのがショックですよ。

【岩崎】 今の時代におけるDV被害者や性被害者の逃げ方としては、ガッチガチに固めた三メートルくらいの外壁で囲まれた、七重・八重くらいの施錠の付いた避難所を造って入るか、岩崎式日本語みたい、加害者の頭脳では理解できない言語を被害者たちが用いて加害者を攪乱させるかの、どちらかしかないというのが、私の「積極的な諦め」なのです。

でも、あれほどの言語学と人工言語学の知識の大家である容疑者をだまくらかす人工言語を作る人は、日本にはいないでしょうね。犯人の言語は、エスペラントのような完全西洋型の屈折語とは違いますが、私共感覚関係で当初から尊敬している、共感者でアスペルガー症候群のダニエル・タメット氏が、マンティ(Manti)という人工言語を制作されているのですが、形態論、統語論、意味論、比較言語学などの分野で、今回の容疑者のほうがレベルが上で、しかも先取りしていましたから。

もしこの犯人が精神病理学を学んで岩崎式日本語を学び、被害女性の日記を読めば、当然解読できるといようなレベルだと思いますよ。

【B】 これからの岩崎式言語活動はどうあるべきでしょうね。

【岩崎】 放置でOKと高を括っていたのが、皆さんの傷を深めたようであれば、申し訳なかつたなと思いますね。

【A】 それはいいですね。

【B】 傷は深まってないからいいけど、メディアの取材対象や加

害者（元夫など）の攻撃対象になる要素が岩崎さんの言語や活動にばかり集中しているのがなんとも・・・。

【岩崎】 メディアからの取材依頼は、六月初めの時点で、もはやなくなっていたから、こちらとしては、痛みはほぼない状態です。

加害者らにとって憎むべき対象であるDV被害者を守ろうとする人工言語の作者も、当然芋づる式に憎まれることになる可能性はないわけではないでしょうが、それはまだ分からないとしか言いようがないですよ。

皆さんのシェルターや施設が元妻さんを預かっているわけでもない以上、何とも言いようがないです。遠くからこのような方々の幸せを祈るといふ姿勢でいることが、大切なだろうと思います。

もちろん、皆さんそれぞれにとっての加害者についても、対策は取っていきます。少なくとも、今お預かりしている皆さんの日記や被害記録は、厳重に管理しておき、もちろん公開もしません。そのあたりは、これまでのスタンスと変わりなくいきたいと思います。

二〇一三／一二／二二

【E】 容疑者の行動を見てみると、病理学的には、まったく発達障害ではない気がしますね。アルカ界限の人たちの言うとおり、自己愛性パーソナリティー障害や反社会性パーソナリティー障害だなどと思えました。

【岩崎】 そのあたりの判断は、もちろん我々ではなく、精神科医たちにお任せするしかありませんが、長期間に渡って交流のある容疑

者界限の内部からそういう話が出てきたという点は、注目しておきたいですね。

【A】 五年くらい前の容疑者と元妻の離婚裁判では、二人の人工言語生活が話題になっただけじゃなくて、裁判中もその言語でしゃべるときがあつたようですね。こんなときは、裁判の公正さとかはどうなるんでしょうね。弁護士が人工言語を勉強しない限り、無理ですよ。

【D】 犯人が法廷で人工言語で被害者にDV発言や暴言しても、周りはわからずに被害者だけ傷つくことでしょね。怖いですね。

【C】 じゃあ逆に、これをヒントにもらって、岩崎式日本語が私たちの加害者の目の前で使ってもOKなくらいむずかしくなれば、DV犯罪防止に使えるかな。そうすれば、もっと不安がぬぐえると思うけど。

元妻さんに岩崎式日本語の存在だけでも伝える機会はないのでしようか。

【B】 じれったいですけど、いつかインターネット上でたどり着いてくれることを静かに待つのが一番のような気がします。

【E】 こちらはダメですよ。

【岩崎】 裁判のときは、元妻さんも容疑者が数年後に殺しに来るとは到底思っていないわけだし、お互いに人工言語でやり合っただけで、何のことかさっぱり分からない人たちにとっては、どっちもどっちと解される状況だったでしょうね。

岩崎式日本語は現在のところ、自我（おもに主語）と述語（述語

論理) の関係を考える一つの言語学的価値観の体系だから、皆さんにとつての加害者らにとつてわけが分からない部分、加害者らを完全に翻弄できる部分は、おもに助詞の部分ですね。体言(名詞)の部分はどうしても知られるし、皆さんの日記や被害記録にも固有名詞が出てくる以上、それに該当する新語を作らない限り、無理ですね。

しかし、アプリアリ言語を目指して新語を作り始めると、皆さんが英語やフランス語を覚えるのと同じで、新しい外国語を始めるのと同じことになりますからね。ただでさえDV被害や後遺症を抱える皆さんにそんな負担を負わせる気そのものがない以上、やはり日本語をベースにした体系を私が作り、皆さんがそれで日記や被害記録をつけて普段は隠しておく、未来に残す、という形がよいと思うのです。

岩崎式日本語は、裁判官や弁護士を翻弄するのではなくて、加害者を翻弄させるのが目的ですからね。日本の警察、検察、裁判官、弁護士などが日本の法律で動いている以上、皆さんの被害記録は日本語ベースの方がいいし、加害者を遠ざける最良の策は、皆さんが隠れ、記録も隠しておくことなのだから、当分はアポステリオリ日本語でいこうと思っています。

関根ひかり×岩崎純一 トーク・イベント（全四回）のお知らせ

二〇一七年三月六日 起筆、攔筆、公開

「言語が生成する場としての作品」を制作している関根ひかりさんの個展「話せることの使命」の中のトーク・イベントで、人工言語「岩崎式日本語」の制作者として語ります。ぜひお越し下さい。

（二〇一七年四月二日、九日 全四回）

← トーク・イベントのご案内はこちら

関根ひかり×岩崎純一 トーク・イベント（全四回）の御礼

二〇一七年四月一四日、起筆、攔筆、公開

四月二日と九日のトーク・イベントにお越し下さった皆様、ありがとうございました。

岩崎式日本語以外のテーマでもすでに交流のある方々から、今回

初めてお会いした方々まで、皆様にお会いできて大変嬉しかったです。

トークの内容は、後日掲載する予定です。

← トーク・イベントの詳細はこちら

また早速、日芸マスコミ研究会のブログに、トークの内容のまとめ記事（ご参加下さった日芸マス研の伊藤さんのご執筆）が掲載されていますので、紹介させていただきます。

「関根ひかり×岩崎純一 トーク・イベントに行ってきました！」
（日芸マスコミ研究会様のブログ）

<http://nuartmasuken.jugem.jp/?eid=774>

関根ひかり × 岩崎純一 トーク・イベント（全4回）

岩崎純一による発表部分の文字記録

二〇一七年一月十五日 起筆

二〇一七年六月四日 記録作成

二〇一七年六月六日 攔筆

二〇一七年六月八日 公開

記録作成 : 岩崎純一

別添資料（当日の配付資料）デザイン担当 : 関根ひかり

二名の著作者が著作権を分有（引用部分を除く文字記録の全ては岩崎が、配布テキストのデザインは関根ひかりが権利を保持）

※ この記録は、「言語が生成する場」としてのインスタレーション作品などで活動中の関根ひかり氏の個展「話せることの使命」（2017年3月27日-4月9日）内でゲストとしてお話しした内容の記録です。

全4回共通テーマ 人工言語とは何か、岩崎式日本語とは何か

※ 別添資料（当日の配付資料）あり

2017年4月2日（日）

13:00-14:30 第1回テーマ 岩崎式日本語と言語障害 一吃音症、コンプレックス—

※ 別添資料（当日の配付資料）あり

15:00-16:30 第2回テーマ 言語の起源と言語障害

※ 別添資料（当日の配付資料）あり

2017年4月9日（日）

13:00-14:30 第3回テーマ 自然言語の法則、人工言語の挑戦

※ 別添資料（当日の配付資料）あり

『岩崎純一全集』第八十五巻「芸術、文化、言語、文学（二の五）」

15:00-16:30 第4回テーマ 人工言語を通して見る社会

※ 別添資料（当日の配付資料）あり

全4回共通テーマ 人工言語とは何か、岩崎式日本語とは何か

皆さん、こんにちは。岩崎純一と申します。よろしくお願ひいたします。
今回、関根ひかりさんの個展でお話しさせていただくことになりました。

全部で4回あるのですが、私の時間はフライヤーにありますように、人工言語を中心に
お話ししようと思います。ただし、人工言語というと初めて聞く方が多いと思いますので、
毎回、独自の内容に移る前に、「人工言語とは何か、岩崎式日本語とは何か」という共通テ
ーマから見ていきたいと思います。

従って、配布しましたテキストは、毎回共通のものが1部、各回のものが4部の、合
わせて5部あります。

まずは、関根さんの芸術との出会いの経緯からお話ししたいと思います。

私は普段は、今回のテーマとは無縁の財団の総務などをしておりますが、様々な分野で
在野研究を行っていきまして、それらをまとめた「岩崎純一のウェブサイト」というサイトを
運営しております。その中で、自分が作っている人工言語「岩崎式日本語」というもの
を扱っています。

2012年には、サイトを通じて依頼された東京藝大での講義でも、岩崎式日本語を紹介し
ました。それ以来、関根さんが岩崎式日本語に興味を持って下さるようになり、お互いに
「言葉・言語」に関する作品の作り手として交流を続けているわけです。私も今回、「lesson」
という映像作品に参加しています。

ただし、今回は、岩崎式日本語自体を詳しく解説したり文法を教えたり、というような、
語学教育的な説明ではなくて、関根さんの芸術と私の人工言語が結びつくところにあるテ
ーマ、「言語」や「言語を使って生きている人間」の面白さを、重点的に語ってみます。

テキストにも載せましたように、岩崎式日本語のウェブサイトは、関根さんと共作の特
設サイトと、私の専門的なサイトがあるのですが、今回は特設サイトに沿って見ていきま
す。

サイトからの引用ですが、「あうはては星空を眺めています。」という文が出ています。
これは、「自分かどうかがよく分からない曖昧な自我を持つ私は、星空を眺めています。」
というような意味です。

「あむか扉をひらく。」は今回用意した例文ですが、「自我が少し曖昧な私は扉をひらく。」
の意味です。

「あうはては」や「あむか」は「わたしは」のいわば活用形の一つなのです。岩崎式日本
語はこのように、動詞や形容詞だけでなく、自分・自我が活用する言語なのだ、とりあ

えず覚えておいて下さい。

では、次のページ、人工言語全般の解説に移ります。

英語やフランス語、日本語のように、ある特定の地域や民族において自然発生した言語は、自然言語（Natural language）と呼ばれています。これに対して、自然言語よりもいっそう短期間に、かつ限定的な個人や団体によって人為的に作られた言語は、人工言語（Constructed language、略：Conlang・コンラング）と呼ばれています。

人工言語の例を見てみましょう。学者や人工言語作者・使用者によって分類が異なるのですが、人工言語は大まかにテキストのように分類されています。

まずは、国際補助語です。これは、母語の異なる地域・民族どうしのコミュニケーションを目的として作られます。人工言語制作者に最も人気であり、学术界・趣味を問わず多くの制作者がしのぎを削っています。しかしながら、21世紀現在で母語話者の存在が確認できているのは、エスペラントやイド語など少数しかありません。

国際補助語の例を列挙しますと、エスペラント、イド語、ヴォラピュク、イディオム・ネウトラル、インターリング、インターリングア、ノヴィアル、無活用ラテン語、グロービッシュ、ベーシック英語、地球同語、地球語、ボアーボム、ジレンゴなどがあります。

次に、自然言語と人工言語の中間に位置する言語です。特に、母語の異なる商人どうしが交易の要衝の地などで使う共通語はピジン言語、それがその土地に定着し子孫・国民が母語として使うようになったものはクレオール言語と呼ばれます。

例えば、インドネシア語は、交易用語が公用語に発展したものの典型です。協和語という言語もあって、満州国で使用されたものですが、「ワタシ、中国人アルヨ」などという言い方がそれです。

他の中間言語としては、例えばフィリピン語は、民族語としてのタガログ語を人為的に標準化して公用語としたものです。それから、ヘブライ語は、エリエゼル・ベン・イエフダーという人が、古代の死語を宗教的事情から意図的に復活させ、自分の子供に使わせ、それがイスラエルの国語にまで発展したものです。

次は工学言語です。下位分類として、哲学的言語、論理的言語、実験的言語などありますが、分類は個人や団体によって異なっており、定説があるわけではありません。先ほどの国際補助語や今から述べる芸術言語も、哲学的言語、論理的言語、実験的言語などに分けられると言えます。

哲学的言語というのは、哲学的・宗教的信念はもちろん、音楽性に基づくものも多く、

芸術言語でもありえます。

例を列挙しますと、Ro、トキポナ、ラーダン、ソルレソル、リングア・イグノタなどがあります。

それから、論理的言語・形式言語ですが、簡単に申しますと、論理的言語・形式言語を突き詰めたものが数学・論理学であると言えます。

人工言語としては、ログラン、ロジバン、チェンリなどがここに入ります。

次に実験的言語ですが、使用実験などをしたことのある人工言語は全て実験的言語と言えますし、同時に哲学的言語や論理的言語や芸術言語でもありうることになります。

イスクイル、エプン語、ユーロパントなどが、実験言語としてよく紹介されます。特に、「自然言語には見られない、作為的に作られた複雑な文法を持つ言語は、子供に身につくのかどうか」を検証する実験や、言語的相対論といって、「人間の思考が言語に束縛されている」とする説を検証するための実験が多く、倫理面からは問題視されることも多いのですが、エプン語はこれらの実験自体を目的として作られました。

それから、各種の補助語です。ここには、身体障害や遠距離の制約を越えた高速での情報伝達や、情報の公開・隠蔽などを目的とした人工言語が色々と入り、自然言語を元にしたものも多いです。

例としては、手話（国際手話、日本手話）、点字、手旗信号（欧文、和文）、モールス符号（欧文、和文）、交通標識、ピクトグラム、市場や商店などで用いられる符牒などがあります。

芸術言語は、小説や映画など芸術作品に出てくる人工言語です。トールキンが生み出したアルダの言語などが有名で、最近では、私は見ていませんが、『スタートレック』に登場するクリンゴン語、『アバター』に登場するナヴィ語が有名でしょうか。アンソニー・バージェスが生み出したナッドサットという言語もあります。

そして最後に、何と言っても世界中で一番普及しているコンピュータ言語ですね。プログラミング言語、マークアップ言語、データベース言語などに分かれます。

では、人工言語全般の説明の続きをもう少し語ります。

歴史上、ほぼすべての人間が自然言語を母語・母国語としていて、いわゆる語学・文学・言語学・国語学などの既存の学問分野も、ほぼすべてが自然言語を対象にしたものです。国家・政治・法律・経済・教育・文化などの人間の営みも、ほぼ自然言語によって記述・運用されていますね。

ただし、欧米では、学問か趣味かを問わず、人工言語の母語話者、学会、コミュニティが多く存在し、人工言語は人間の文化・精神活動の一つのトピックとして確立されています。

先ほども述べましたが、現在、最も普及し実用されている人工言語は、国際補助語のエスペラントやプログラミング言語などのコンピュータ言語、手話・点字などの障害者補助言語、市場・商店での符牒などです。

また、言語のすべてを自作した場合から、文字だけや単語だけなど一部を自作した場合まで、さまざまです。文字・音声・単語など多くの要素を自作した人工言語はアプリアリ（先験）言語と呼ばれ、一部だけを自作した人工言語はアポストリアリ（後験）言語と呼ばれます。

またそもそも、すべての自然言語は人工言語であると考える人もいれば、自らが使用している人工言語は自然言語であると主張する人もいて、分類法に定説があるわけではありません。

現在、日本における人工言語の扱いとしては、学問・学会や公用語・国語政策としての確立は見られませんが、趣味としての規模と人気は世界的に見ても極めて大きいです。日本では、アニメ、マンガ、ゲームなどの同人・サブカルチャーと結びついた人工言語が多いです。

では、岩崎式日本語の概要を説明してみます。

岩崎式日本語は、私岩崎純一が、精神障害や言語障害の研究のために考案・制作した人工言語です。人工言語は、古今東西多く存在していますが、岩崎式日本語は、非常に閉鎖的なコミュニティの中で使用されています。芸術言語として、自分以外の個人や集団を補助するために制作している点でユニークといえると思います。

特に、現代日本語・現代日本社会に対する精神障害者の違和感を記述することを目的としています。精神障害者の自我の在り方を主格構造にとりこむことで、人間の精神や感情が品詞や時制の枠組みそのものを変容させ、言語が成立していくようになっています。

私は、精神障害を持つ言語障害者や、言語表現を極端に不得手とする人に対する強い思い入れを持って、「人間が言葉を交わす」・「人間が他者に何かを伝える」とはどういうことかを考える行為の一つとして、岩崎式日本語を創作しています。そして、私自身、その行為は芸術表現であるという自覚を持っています。

先ほど説明しました人工言語の分類に、岩崎式日本語が当てはまるかどうかを見てみましょう。当てはまる場合は（○）、当てはまらない場合は（×）、やや当てはまる場合は（△）をテキストに記しました。

岩崎式日本語は、一部の日本人のために作っているため、国際補助語ではありません。一方で、自然言語である日本語を利用して作っているため、自然言語と人工言語の中間の

言語と言えます。色々な哲学、論理学、数学を参照しているため、哲学的言語や論理的言語でもあり、実用実験もしているため、実験的言語でもあり、全体として工学言語と言えます。それに、手話のように人を補助する言語でもありますし、日記や文芸にも使うので、芸術言語です。コンピュータ言語とまではいきませんが、先ほど述べたように、論理的言語の性質があります。そして、元の日本語を借用しているため、アプリアリ言語ではなくアポストリアリ言語です。

岩崎式日本語の使用者の多くは女性です。男性は少ないですが、LGBT、セクシュアル・マイノリティの方はある程度います。女性使用者の多くが犯罪・暴力・DVなどの被害者で、鬱などの気分障害、不安障害、恐怖症、何度も手を洗ったりカギを確認したりする強迫性障害、PTSD（心的外傷後ストレス障害）、自我の変容・分裂を伴う解離性障害、適応障害、性関連障害などに言語障害が伴っている方々です。

それから、私が和歌を詠み合っている巫女さんや古典関係者にも使用者がいます。岩崎式日本語の文法は、和歌・古語を大いに参考にしています。

その右側をご覧ください。私は、「岩崎式日本語」の英語訳を「**Iwasaki's System of Reconstructing Japanese**」としていますが、これは直訳すると、「日本語の再構築・再考のための岩崎式システム・機構」となります。また、この言語活動を「学問体系」と見た場合は「岩崎式言語体系」と呼んでいます。この英語訳も、「**Iwasaki's System of Reconstructing Languages**」としています。「言語」よりも「システム」、「体系」の名がふさわしい理由が分かるクイズを、ここで出してみたいと思います。

主語の部分に様々な人称代名詞と「風」が書いてあり、それぞれ「扉」、「ひらく」とあります。（ ）内に助詞の「は」、「が」、「を」、「で」のいずれかを入れて下さい、複数回答可です、という問題です。皆さんも考えてみて下さい。

まず、主語が「私・僕」の場合です。言語障害や精神障害がない場合で一番多い回答が、「私は扉をひらく」や「私が扉をひらく」です。皆さんのほとんども、おそらくこう答えたとしますし、私も普段はこの回答になります。

一方で、岩崎式日本語使用者、特に言語障害と精神障害の合併症の方は、「私で扉がひらく」や「私で扉をひらく」も合わせて答えます。自分自身を、まるで自分の手を離れた別人のように扱っています。

「で」という助詞は、「コップで飲む」や「電車で行く」のように、道具・手段を表す助詞です。従って、ここでは、「私は、自分という別人の手によって扉がひらくのを観察する」というような意味と言えます。

ほかにも、「私が扉がひらく」、「私で扉でひらく」、「私を扉でひらく」といったミスもあります。先ほどの「は」、「が」、「を」、「で」をどこにでも入れてしまうのです。

これらのミスは、意図的な文学表現ではありません。心理的なショック症状から、実際に助詞の使い方に混乱をきたしたもので、文法が錯綜しているので、「錯文法」と呼ばれます。あるいは、「分かりません」、「何も入りません」という回答もあり、これは文法の喪失状態にあるので、「失文法」と呼ばれます。これらは、言語障害の中でも失語症と呼ばれます。

主語が「私とあなた」になると、多くの方は「私とあなたで扉がひらく」や「私とあなたで扉をひらく」などと、「で」を付けるようになります。

岩崎式日本語使用者のほうは、相変わらず先ほどの回答と変わりません。「私」にも「私とあなた」にも「で」を入れる傾向があります。

では、「私とあなた」を「二人」に変えるとどうなるでしょうか。「二人」には、私を含む二人の場合と、私以外の二人の場合がありますが、多くの日本人も「二人が扉をひらく」と「二人で扉をひらく」の両方を答えます。

次に、「三人」の場合です。「三人で扉をひらく」がおかしいという日本人はほぼいなくなります。

「みんな」になると、もはや「みんなで扉をひらく」が日本語としておかしいという人はいないと思います。

岩崎式日本語使用者のほうは、相変わらず「何でもあり」の状態が一貫しています。

主語が「風」になると、今度は多くの日本人にとっては、「風で」の場合の「扉」に付く助詞が、主語が人間のときと変わります。つまり、「風で扉がひらく」は自然な言い回しで、「風で扉をひらく」という日本語を、おかしい、風を人間が操っているように聞こえると答えます。

岩崎式日本語使用者のほうは、やはり「私」の場合から、「風」の場合まで、回答が一緒です。

テキストの下の方に、それぞれの特徴をまとめました。

最初の注目点は、多くの日本人にとっては、主語が自分・一人称だけのとき、助詞の扱い方が特権的であるという点です。「私で扉をひらく」とは言わず、「私が扉を」と言いません。

ところが、二人以上の動作となると、「二人で」や「みんなで」が登場します。述語「ひらく」の動作を行う人間が不特定多数になって、自分の影響力の割合が小さい共同作業になると、自然現象としての扱いに近づいていくわけです。

さらに、主語が「風」になり、人間の気配が完全に消えると、今度は「風で扉をひらく」の回答が消えます。

多くの日本人にとっては、例えば「私」が「私の手」になると、「私の手で扉をひらく」と言うのが自然になります。「私でやっておきます」とは言わなくても、「私のほうでやっておきます」とは言います。

実は、以上のように答えた人は、岩崎式日本語を使う必要がなく、逆にその文法をものすごく難しく感じる可能性が高いです。

言語障害がない状態が何を意味するかというと、自然環境と比べたときの人間、他人と比べたときの自分、自分の色々な身体部位と比べたときの「私の脳・自己・自我」というものが、特別なものだという無意識の価値観を、一般的な母語の文法に変換できる状態、ということです。

現代日本語を含めた先進国の自然言語というのは、政治、外交、ビジネスなどで自他の利害関係を明確にしたり、人間と自然とを区別したりするのに有利な文法を持っていて、ある意味では人工言語です。私自身も、普段の仕事では、このような文法でしゃべっているわけです。

多くの定型発達者・社会人・健常者は、自我がすでに或る一定の価値観に束縛されていること、それが日本語においては助詞の使い方などに表れてしまうことに気づかないで生活していることになりませんが、これを「社会性」や「常識」と呼んでいます。

一方で、右下に移りますが、重度の心理症状や言語障害を抱えた人たちの一部が、主語が何であろうか助詞の使い方を区別しないのは、自我や他人や自然現象といった世界の構成員の関係性を「社会常識的な」方法ではとらえていないからです。

他者・自然現象から明確に区別された自己の主張が乏しく、「私で扉がひらく」や「私で扉をひらく」のように、自分自身をも自然現象のように傍観して扱うのは、「心の傷を希薄化したい、被害がなかったことにしたい」という精神障害の防衛本能の特徴です。

興味深いのが、英語圏でも、こういった障害の方々は、「The door opens my.」や「We the door open you.」などと間違えます。それに、言語を問わず、幼少期にはこういう間違いが頻繁に見られます。

使用者の方は、現代日本語の文法ミスが激しくて悩んでいる時期などに、先ほど示した「あうはては扉をひらく。」といった岩崎式日本語文を私に書いて送ってくれるわけです。これ自体が、「私が」と「私で」の区別ができない自分を許可して下さい、という私へのメッセージになるわけです。文法ミスの表明方法が、色々あるわけです。次のページに載せましたが、「あうはてで扉をひらく。」、「あの扉ひらく。」、「あむか扉でひらく。」などです。

岩崎式日本語は、精神障害者・言語障害者との交流を中心として、日本語と日本社会全体を考える試みなのです。言葉障害や精神障害を社会人や健常者の価値観や「社会性」や「常識」でリハビリ・治療するという発想がどういうことなのかを、私なりに研究しているわけです。言葉を覚える、失う、取り戻すといった概念を一度解体し再構築してみるのが、岩崎式日本語だと言えらると思います。

その右に移ります。ここで、言語学や語学、言語障害、自然言語、人工言語などというときの「言語」や「言葉」を、あくまでも便宜的に定義してみたいと思います。

まず、日本語にも英語にも音声はあるわけですが、動物の鳴き声だって音声です。イルカやコウモリは、超音波で情報伝達や障害物検知をしています。それらは動物の言葉なのかという問題が生じます。あるいは、音声を発しない人間の「心の言葉」や目力、態度などは言葉でしょうか。

今は、これらの正しい答えを見つけるというわけではなく、あくまでも便宜上、言語の定義には入れないと考えてみます。言語とは、「人間が声帯・口から発する音声や、それらの意味を置き換えた無音言語や手話、記号表現」を指す、と決めてみるわけです。

文字については、人類史上に登場した多くの言語は、文字を持たないか、支配者（宗主国、戦勝国）や公用語の文字を採用してきました。従って、文字の有無は問わず、文字がなくても言語とします。

そして、文法です。例えば、「私は今、エサが欲しい」という思いも、犬は「ワン」、猫は「ニャー」と鳴いて表現しますね。「ワ」が「エサが」で、「ン」が「欲しい」、といった分析はできませんし、「ワン」や「ニャー」はあくまでも日本語です。英語では、「bowwow」です。従って、今は動物の鳴き声も言語の定義から外してみます。

逆に、例えば「おい、お前、メシ！」という、妻に対する夫の言葉は、ボスザルの大声にも似た単純な名詞の羅列といえども、「お前が俺にメシをくれ」の省略なので、やはり人間の作文です。この夫の大声は「言語」です。便宜上、SVO（主語、述語、目的語）や5W1H（When、Where、Who、What、Why、How）などを解析できる音声や文字列は言語とする、ということです。

さて、以上が人工言語や岩崎式日本語の全般的な紹介です。ここから、各回のテーマに移っていきます。

第1回テーマ 岩崎式日本語と言語障害 —吃音症、コンプレックス

スー

では、今の定義を念頭に置いて、初回の独自の内容に入ります。「岩崎式日本語と言語障害 —吃音症、コンプレックス—」というテーマです。

今回の関根さんの個展では壁に言葉が掲示されていますが、これは、ソ連の有名な映画監督タルコフスキーの『鏡』という映画の冒頭です。女性が吃音症の青年を治療しているシーンの会話です。吃音症というのは、かつては「どもり」や「どもる」と言われた症状で、言葉が連続したりうまく出なかったりする症状です。原因は、心理的要素、遺伝的要素、頭部外傷など色々あります。

ここで、関根さんにこの冒頭の治療シーンのセリフ、展覧会ステートメントを読んでもいただきます。関根さん、よろしくお願いします。

(関根ひかり氏による展覧会ステートメントの朗読始め)

3つ数えると手は動かなくなる

手を見て

1

2

3

手は動かない

もう動かさない

動かそうとしても動かない

どうりきんでもピクリともしない

この緊張が解ければ

話せるようになるわ

自分の声を怖がらずに

すらすら話せるようになるのよ

今後一生 いいわね

私を見て

3つ数えたら緊張が解ける

指から 言葉から

1

2

3

言って“僕は話せませす”と

「僕は話せませす」

——吃音症の治療の光景からはじまる古い映画。

世界の言葉を全て理解できたなら世界で一番孤独になるだろう。

なにごとかをうまく言い尽くせないとき、それはわたしがいけないのではなくて、わたしが知っているこの言葉が至らないのだ。

「わたしは悪くない」

「きっとあの人も悪くなかった。」

そう思っていると、ゆっくり言葉が使えなくなっていく。

(関根ひかり氏による展覧会ステートメントの朗読終わり)

どうもありがとうございました。

私は関根さんを吃音症や何かの言語障害だと思ったことは一度もないのですが、関根さんが初めて私にメールを下されたときには、このようにお書きになっていました。

(引用始め)

ずっと、言葉というものについては思い入れのような物があって、コンプレックスにも感じていました。自分の伝えたいことを表すためにぴったりだと思って選んだ言葉では相手には伝わらなかつたり、自分の頭の中でものを考える用の言葉と、実際にその内容を話す用の言葉にあまりにもズレがあつたりして、言葉によって自分は不自由なのだとも思っていました。

(中略)

美術作品をつくって生きていきたいと思ったのも、言葉を補うものが自分に必要だったからです。

(引用終わり)

関根さんも、ある意味で言葉に苦しみ、新たな言語芸術を生み出そうとしてきたわけです。言葉についての思い入れが私と似ていると思っています。関根さんも、『鏡』の冒頭シーンのような言語障害の強制的な治療法について、本当にこれでよいのかと思っている点は、私と共通しています。

そこで、岩崎式日本語と言語障害の関係についてお話ししてみます。

岩崎式日本語の使用者にも吃音症の人がいます。DV被害などで解離性障害になり、吃音症も併発した女性です。この女性は、自我が自分の身体・頭・脳の外にあるように感じるわけです。例えば、今ここにあるコップの中に自分・自我がいると感じながら、体は元の位置にあることも頭では分かっている、被害に遭っている自分の体をコップの中から見ているという状態です。

テキストの例文をご覧ください。

この女性は、「今日、私が外を歩いているとき、強い風が吹いてきた」を、「今日、私の外で歩いているとき、強い風で吹いてきた」などと、先ほど説明した錯文法を起こしながら言ったり、「今日、私がそちゅ、そき、そぐ、そとを歩いているとき、強いかちよ、かぶ、かぜが吹いてきた」と、吃音や、単語が錯綜する錯語を起こしながら言ったりします。自我の位置が分からないので、自分と風と外（屋外）の位置関係が分からず、助詞が錯綜するわけです。

実はこれは、心の問題による言語障害とはいえ、脳血管障害による言語障害に似ています。

脳血管障害の人も、例えば、「何の花が好きかと聞かれても、すぐには答えられないですよ」を、「何に花の好きかと聞かれても、すぐには答えられないですよ」と言うなど、助詞が混乱することがあります。今挙げた女性も、この同じ例文で似たような間違え方をしました。

あるいは、岩崎式日本語の使用者も脳血管障害者の方も、「今日は久々に母と◀さんと外食して、電車で帰ってきました」を、「今日は久々に母、◀さん、外食、で、電車、帰ってきました」と言ったりします。これは、名詞だけが残っていて助詞が抜け落ちているので、失文法と言えますし、また、電文体とも呼ばれています。昔の電報で、「父が危篤だから、すぐに帰れ。返信を乞う。」を「チチ キトク スグ カエレ ヘンシン コウ」などと、助詞を抜かして情報伝達を簡素化・高速化していたことにちなんで、失語症の世界ではよくそう呼ばれます。

しかもこれは、アルツハイマー型認知症の高齢者と正反対の症状なのです。アルツハイマーの人は、「今日は久々に母とあの人とあれして、あれで帰ってきました」などと言いますよね。「そのあれがああなってこうなって～」と言ったり、「おい、お前、あれを持ってこい!」、「あれって何よ!」と夫婦ゲンカになったりするケースがよくあります。

このような「アレコレ語」は、自我の希薄化ではなく、自他の区別、損得勘定、主語・述語・目的語の関係性への理解、つまり、助詞の正答率は保たれています。物の名前、人の氏名など名詞の記憶が抜け落ちている状態での自己主張になっているため、特に初期の認知症の高齢者がわがままだと見なされる理由になっています。アルツハイマーの方は、語学・記憶能力自体は衰えているため、岩崎式日本語には適しません。

ただ、脳血管障害者のミスの方が岩崎式日本語使用者のミスに似ていて、アルツハイマーの人のミスはその逆だとはいえ、脳血管障害による言語障害も、脳の物理的な損傷なので、まずは医学的見地から言語聴覚士のリハビリを受けるべきで、心理的ストレスをテーマとしている岩崎式日本語によって治るものではないです。

一方、先ほどの女性のように、心理的ストレスから言語障害を発症した人は、物や人の名前を忘れない状態で人間関係・世界との関係に傷ついているので、言葉のつながり方、つまり、助詞の使い方のほうに苦しむわけです。

次のページです。岩崎式日本語には、色々な表記法があるのですが、まず冒頭が、先ほどの解離性障害の女性を書いた漢字仮名交じり文です。岩崎式の表記法の中でも、一番長い書き方です。

「私（能、抽化、未然、解離性障害）、今日、外（そと）（具及間、抽出、已然）歩いている（抽化、未然）とき、強い風（識具間、抽出、已然）吹いてき（心描）た。」

「私」や「外」、「歩いている」などのあとのカッコ内は、先ほどのクイズのカッコ内のミスの仕方を、岩崎式日本語の決まりに沿って書いたものです。「未然」・「已然」などの言葉は、古文の勉強のときに「未然形」・「已然形」などで聞いたことがあると思いますが、これらにも岩崎式独自の決まりがあります。「能」や「抽化」、「具及間」などは、相当難しい言語学的説明になってしまうので、割愛します。

次の仮名書きが、今の例文の読み方でもあります。平安女流文学風の仮名書きでもあるため、日記で好んで使われます。

「ぬの、きょう、そと一てあるいているろとき、つよいかぜはてふいてきうた。」

もう一つ書き方があり、私が自分のパソコンでの記録でよく使うものです。これによって、使用者にどのような心の傷や文法ミスの傾向があるかが自分のパソコンで検索しやすくなります。

「Ga(NO, km, DD)、今日、外(GU-KYU, si)歩いている km とき、強い風(SHIKI-GU, si)吹いてき b た。」

こういう言語障害者や精神障害者の方々は、普段は家族、友人、職場に自分の症状をどう説明しているかという、「私は解離性障害という障害で、過去の苦しみにより、うまく話せないという症状があり、外を歩いているとき風が吹いてきたという文を言うときにも吃音や間違いを起こしてしまい、外で私に風が吹いているのか、私が風で外を吹いているのか、よく分からなくなりまして、・・・云々」などと説明しているわけですね。これがそのまま、今の岩崎式日本語文の現代日本語への翻訳になります。

要するに、現代の東京標準日本語の文法からかけ離れた心の傷を負った人がその日本語で人とコミュニケーションしようとする、冗長にならざるを得ず、それだけ疲労困憊するから、吃音やミスや片言や無言をたくさん入れて命をつながざるを得ないのです。

岩崎式日本語は、こういった人たちの心が、常識的な文法や社会性といった規範に対してどういう構造をとっているかを研究するものでもあります。

右下に行きますが、先ほど、岩崎式日本語の使用者の多くは、被害体験で発症した精神障害に言語障害が合併している女性や、巫女さん、和歌関係の女性だと述べました。

ところが、先天的に言語障害・学習障害・発達障害がある使用者の多くは男性なのです。つまり、岩崎式日本語を使うという以前に、そもそも現代日本語の使用や語学に難があります。

言語障害の見分け方は、特定の人物、例えば上司や先生などとの会話や、特定の場所、例えば職場や学校、電車、買い物のレジなどでのみ吃音や文法ミスを起こす場合、心理的・社会的ストレスに原因があり、療養すると症状が軽減されます。相手や場所を問わず症状が出る場合は、脳や身体の物理的なダメージの可能性が高いです。岩崎式日本語は医療行為ではないので、前者に偏って効果が高いです。

使用者の方々が、岩崎式日本語で書いた日記や被害記録などをどう扱っているかについては、非公開希望だったり、自分や両親や夫や加害者の死後に公開希望だったり、私や友人にのみ閲覧希望だったり、色々な条件を希望しています。私が預かっているものについては、ご希望通りに扱おうと考えています。

公開したとしても、岩崎式日本語の文法が加害者に読み取られる可能性は低いのですが、そうは言っても、固有語以外の単語は現代日本語と同じですし、固有名詞は黒塗りにせざ

るを得ず、手書きの日記や被害記録は筆跡で分かりますから、ネット公開はできないです。母親や姉が加害者であるケースもあって、娘や妹の書いたものだと知られることもあり得ます。公開可能な部分だけを私が入力し直したり手書きで書き直したりして、公開することになると思います。

今回の関根さんの個展タイトルは「話せることの使命」ですが、「話せないこと」、例えば吃音症、失語症などの言語障害との対比が浮かび上がってくるわけです。このあたりは、私が感じている「岩崎式日本語を制作する使命」と似たものを感じますが、「言語障害がない自分にできることをやる使命感」だけでなく、「言語を話せてしまう不安という束縛・運命」もあると考えます。

今回、「lesson」という作品に参加して、私自身が「話せることの使命」を感じました。

「lesson」には、東京藝大助手の宇都縁さんと、私が登場していて、宇都さんが教える役、私が学ぶ役だったのですが、この作品のような単純な復唱、おうむ返しができない言語障害もあります。逆に、おうむ返しできるのに文章の意味を理解できない、という言語障害もあります。

私も、しっかりと意味をとる前に復唱させられるということを繰り返してみても、本当に意味が分からなくなってきましたが、それは、「意味の理解以前に、ただ純粹に、無為の境地で復唱する」感覚でもありました。

つまり、言語障害に近い状態を体験できるよい機会となった、そして、そもそもその状態が本質的に障害であるのかどうかを疑って活動している私自身の学術の方向性に改めて肯定的確信を持つことができた、ということです。岩崎式日本語の活動にあたって、このような感覚を大切にしたいと考えています。

今回は、「岩崎式日本語と言語障害 ―吃音症、コンプレックス―」というお話でした。どうもありがとうございました。

第2回テーマ 言語の起源と言語障害

では、第2回のテーマ「言語の起源と言語障害」に移ります。テキストをご覧ください。

今、便宜的に「言語」の定義を行いました。では、そのような定義の言語を操る唯一の生物である人間とは、どういう存在なのでしょう。

人間を生物学的に、大分類から小分類に向かって順に定義しますと、長いながらも大変面白いので読みますが、真核生物、動物界、脊索動物門、脊椎動物亜門、四肢動物上綱、哺乳綱、真獣下綱、霊長目（サル目）、直鼻猿亜目、狭鼻下目、ヒト上科、ヒト科、ヒト亜科、ヒト族、ヒト亜族、ヒト属（ホモ属）のホモ・サピエンス・サピエンスという生き物です。

ヒト族（「家族」の「族」のほう）の中にチンパンジー亜族、つまり、チンパンジーとボノボとヒト亜族がいて、ヒト亜族で有名なのが、アウストラロピテクスなどのいわゆる猿人ですが、絶滅しています。

いわゆる原人、旧人、新人はヒト属（「所属」の「属」のほう）、別名ホモ属に含まれます。ホモ・サピエンス・サピエンス以外のホモ属は絶滅していますが、最近の研究で、原人のホモ・エレクトス、旧人のネアンデルタール人やデニソワ人、新人のホモ・サピエンスの併存期が、20万年間から数万年間まで諸説あるものの、長かったことが分かり、今では「原」、「旧」、「新」の呼称は避ける傾向にあります。

この頃は、お互いに人口が数千人から数万人の規模ですから、遭遇するのも人生に数度か、全く遭遇しないかのどちらかですが、一部のホモ・サピエンスが主にネアンデルタール人やデニソワ人と遭遇・交配しています。我々現生人類の遺伝子からも、交配の痕跡が発見されています。重要なのは、ホモ・エレクトスの子孫がネアンデルタール人やデニソワ人、その子孫がホモ・サピエンス、という祖先・子孫の関係ではなく、併存状態での交配のあとにホモ・サピエンスだけが生き残ったという点です。

厳密に言えば、今の多くの人類は、ホモ・サピエンスとネアンデルタール人の交配種で、ホモ・サピエンスから継承している遺伝子の割合が圧倒的に高いので、そのままホモ・サピエンスと呼んでいるということです。

当初は、ネアンデルタール人の文明の程度のほうが高く、脳容積もホモ・サピエンスより大きかったのですが、最後に立場が逆転して、ホモ・サピエンスが唯一の勝者になりました。

ホモ・サピエンスも一種類ではなく、ホモ・サピエンス・イダルトゥという兄弟または

直接の祖先がいました。一応は我々と違う動物なのですが、彼らはその辺を歩いていても、ヘンだなと思うくらいで、たぶん分からないと思います。でも、声をかけてみると分かります。彼らは先ほどの定義の言語を話せないわけです。普通、ホモ・サピエンスや現生人類と言うと、ホモ・サピエンス・サピエンスのことを指します。

それに、他のホモ属と共存していた頃のホモ・サピエンスは、火や道具は使えど、言語、衣服、それから、洞窟などではない堅穴住居などの人工の住居は使わなかったのです。しかも、被服文化や住居建築の開始というのは、例外なく簡単な言語獲得の後で、現代まで不完全です。

テキストの「現生人類の言語獲得本能の位置」というのがそれで、言語が真ん中に挟まれています。

アマゾンの原住民などの生活区域に言語学者や文化人類学者が入って、衣服の着用や近代道徳を強制しても、失敗に終わることが多いにもかかわらず、彼らでさえ一定の自然言語を話しています。他のホモ属との共存期に他の現生人類を離れて孤立した原住民、例えばアボリジニなども、言語を持っています。

言語も衣服も住居も、石器や槍、銚、土器と同じく、広い意味で「道具」の一つですが、衣服や住居は言語に遅れて出てきます。

まず衣服について、どうして発祥時期が遅れるのかということ、衣服は別に木の実を取ったり煮炊きをしたり獲物を捕まえるのに必要ないから、そもそも思い浮かばないのです。アマゾン原住民も、服を着ていないか、葉っぱや腰巻きで隠す程度なのに、ネックレスや腕輪、耳飾りはしています。これとて、装飾ではなく魔除けや動物除けとして始まります。

体毛が退化し、自然言語の発祥が確認されたあとも、長期に渡ってアマゾンやアフリカや太平洋地域の原住民で被服文化が発祥していないことから、衣服の着用は、倫理道徳ではなく、「赤道付近での食糧貯蔵技術が上がって狩りが減り、衣服による体温調節や身体の隠蔽を脳が思いついたから」というのが真相なのでしょう。

住居建築が遅れて出てくるのも、衣服と同じく必要性がなかったからですし、当然、狩猟採集生活をしていて、定住しないので、むしろ簡単に解体・運搬できる住居しか作られません。定住を脳が思いつくと、家を建てるという技術が発展するわけです。

そうなると、自然言語も、生きるか死ぬかの必要に迫られて発生した技術だろうと予想できます。ただし、言語獲得本能が、どのホモ・サピエンスの部族にとっても、衣服や住居に先立って、つまり、「身体の隠蔽や安全、定住」に先立って刻印された運命であるというのは、実に興味深いです。

火・石器は、全てのホモ・サピエンスが使っている。言語は、文字の使用を除き、全てのホモ・サピエンスが持っている。ところが、被服文化と住居文化は、現代でも不完全、と

ということです。

自分の故郷の言葉、第一言語を「母語」や「mother tongue」と言いますが、自然言語が母系の文化と見なされているのは一般的です。多くの自然言語で「母なる言語」、「母性の言葉」、「母親がしゃべっている言語」が「自分の第一言語」という意味です。

一見すると、帝国植民地主義時代にキリスト教的な聖母マリアの母性愛の教えがアフリカや南米にも普及したから世界中で「mother tongue」の翻訳として「母語」と言うようになった、と思いがちなのですが、そうではなく、以前から自然言語の伝承は母系の意識があります。

これは、男性たちが狩りに行っている間、言葉を教えるのが当然母親や女性たちだったことと関係があるでしょうね。それに、一夫多妻の時代なので、特定できる親が母親のみだったということも影響しているでしょう。

そうすると、言語獲得本能が身体を隠したい本能や定住したい本能の先に来る理由は、親やそのムラ社会が子供たちに物事を教えたり危険を伝えたりするため、つまり、ホモ・サピエンスが減びないようにするためだったのだと、私は思います。

さて、その下に移ります。このような言語の起源の探究や、現生人類と旧人以前の混血の研究は、今でこそ自由に行われ、岩崎式日本語の活動の中でも思う存分に行っていますが、帝国植民地主義時代・戦前の西欧列強・キリスト教諸国では長らくタブーでした。ダーウィンの進化論の衝撃が大きかったためです。特にフランスが厳しく、パリ言語学協会が「言語起源論」と「普遍言語の創造（国際補助語の考案）」を禁止し、他国もそれに倣いました。

当時は、「黒人は人間でない、サルと人間の間の動物」だとか「白人あるいはキリスト教文化圏以外の言語は劣等言語」と信じていた人も多かったですし、アボリジニなどの原住民ハンティングがスポーツだったこともあり、研究により白人やキリスト教徒の優生思想や選民思想にとって不利な結果が出ることを恐れたのです。ただし、インディアンや黒人もホモ・サピエンスに違いない、インディアンや黒人の言語も人間の言語に違いない、という仮説・予測はすでにありましたが。

T4（テーフィア）作戦と呼ばれるナチス・ドイツの作戦では、ユダヤ人以外にも精神障害者、知的障害者、言語障害者の虐殺が行われましたが、表向きは「劣等分子の安楽死・断種」とされました。

日本で起きた事件で記憶に新しいのが、2016年の相模原障害者施設殺傷事件ですが、犯人は元職員であり、殺害を救済と見ていた点は、かつての優生思想、選民思想によく似ています。本人も、「ヒトラーの思想が自分に降りてきた」と述べていたようです。施設に押し入って、まず言葉を投げかけ、返事がなかったりおかしかったりした人だけを選んで、

殺害しています。

次のページに移ります。時代は変わって、戦後、人類の自然言語獲得のメカニズムに迫ったのが、チョムスキーというユダヤ系アメリカ人の言語学者です。

チョムスキーは、赤ん坊であっても白人であっても黒人であっても、難なく母語を身につけるのは、そもそも人間の脳に生得的にその能力「普遍文法」が備わっているからだと考えました。先に「私は扉をひらく」という例文を出しましたが、「ウッホッホ」と叫んでいたサルの子供が、ある日突然、自力で「私は扉をひらく」と言い出すような状態で、そのようになる法則を「生成文法」と呼んで理論化しています。となると、どこかでそんなホモ・サピエンスの個体が現れないとおかしいのですが、チョムスキーはそんな脳を持つ一個体が突然出現したと見ています。それ以来、言語は人間だけの生物学的器官であり、他の動物の進化とは不連続だという言語生得説を主張してきたわけです。

チョムスキーは、のちに言語学以上に、政治的発言や講演活動、特にアナキズム（無政府主義）に夢中になり、ナチスやイラク戦争・アメリカ政府だけでなく、政治権力全般を批判し、天皇批判・日本批判もします。岩崎式日本語の観点からすると、論理の飛躍だとしか思えないのですが、これがチョムスキーの姿勢です。どうしてかと考えてみるに、「人間においては言語能力が特権的・自動的に備わっている」と信じるチョムスキーにとっては、アメリカ政府も日本政府も、作為的な権力主体は全て不要なものだからです。

しかし、私としては、従来の西欧言語学に対して東欧的・ユダヤ的感覚から新しい言語学を展開したチョムスキーも、少数民族言語を、西洋言語を操る白人の定型発達者・健常者・非言語障害者の生成文法理論に当てはめて解釈していると感じます。それにチョムスキーは、他の霊長類との声帯の構造などの解剖学的比較や、心理状態に影響される吃音や文法ミスなどの事態や、人間の詩歌や鳥の鳴き声・求愛行動の際の旋律的な鳴き方などの音楽的事態は、自身の考察から排除しています。

チョムスキーの興味は、言語運用、つまり「言葉の使われ方」にはなく、言語能力、つまり「何の前兆もなく、その国らしさ・文化らしさとは無関係に、人類の脳にプリインストールされている自立的な語学性能」にあります。だから、私から見ると、チョムスキーの言語学と、国家権力の否定とは、つながっているように思えます。

一方でその右ですが、岩崎式日本語では、動物の鳴き声、人間の詩歌、吃音・言語障害、複雑な文法は、テキストのように上から下まで連続していると見て、高等言語・劣等言語といった言語の優劣や高等生物・下等生物といった進化・退化の概念を、一度解体してから再構築することを目標としています。

幸田露伴が1944年に『音幻論』という本を書いているのですが、「シとチ」という話の中にこんな面白い記述があります。風に関する古い日本語を並べてみると、「風（カ“ゼ”）、嵐（アラ“シ”）、東風（コ“チ”）、疾風（ハヤ“テ”）、旋風（ツム“ジ”）」というように、

サ行、ザ行、タ行で終わるが、古代日本には、風が吹くたびに片言で「ゼ」、「シ」、「チ」などと呼称していて、それがサ行、ザ行、タ行音に集約されたのではないかというのですね。今でも日本人は、風が「サー」、「ザー」、「ダー」と吹くなどと言いますし、私は、これはデタラメな説ではないと考えます。

この幸田露伴の『音幻論』の感覚は、現在では「音象徴」と呼ばれて言語学でも研究されています。

中には、インチキ説・デタラメ説もありまして、例えば、「日本語の“名前（ナマエ）”とドイツ語の“name（ナーメ）”は似ているなど、日本語とドイツ語は似た単語が多くあるから兄弟言語で、日本人とドイツ人は同じ遺伝子を持つ優等人種、ナチスの言うアーリア人種だ、だから大日本帝国とナチスは友達としてうまくやっていたはずだし、戦争で勝てるはずだ」、といった説もあったのですが、デタラメです。そういう時代ですので、「シとチ」を書いた幸田露伴自身も、当時の他の作家や軍部や新聞記者と同様、この程度の気分で書いた可能性はあります。

しかし、この幸田露伴の仮説の正しさがあからさまに適用できる例もあります。例えば、英語の「spring（泉）」、「spread」、「splash」、「splatter」、「sprinkler」の「sp」の摩擦音・破裂音は、「飛び散らす、はね散らす」という、これらの単語に共通する意味を表しています。そうすると、擬音語や擬態語、いわゆるオノマトペは、まさに音象徴の典型で、言語の起源のカギを握っていると思います。

私も、「私は扉をひらく」で言えば、サル時代の「ウッホッホ」が、「ワ（我・吾）、ト（戸）、ビヤ（ひらくときの戸の音）」、「私、扉、ひらく」、「私は扉をひらく」というように変遷し、ついに名詞と助詞の機能が合体して西洋語の「I」になったという解釈をします。

私は何と言っても、各民族言語に優劣、高等・下等の別を設けない姿勢を自分のポリシーや鉄則にしたいと思っていて、偏った社会ダーウィニズム、社会進化論には疑問を投げかけるわけです。チョムスキーにさえ垣間見える、優等言語と劣等言語の区別の意識は、岩崎式日本語には取り入れないのです。

私は、心的外傷による言語障害は、動物的防衛本能に基づく言語の起源の参照・実践だと考えており、悠久の人類史を見せてくれるものだと思っています。むろん現代は、心にダメージを与える天敵が、古代のような他の動物や自然災害から、虐待加害者などに移行している時代だと言えらると思います。

今回は、「言語の起源と言語障害」というお話でした。どうもありがとうございました。

第3回テーマ 自然言語の法則、人工言語の挑戦

第3回の独自の内容、「自然言語の法則、人工言語の挑戦」に入ります。

お配りした図は、一番左に書いてある自分と同じ自然言語（母語・母国語）を使っている他人や集団がどこまで広がっているか、自然言語が人間社会でどういう位置を保っているか、を示しています。オレンジ色の語が、自分と同じ母語の話者を指します。自分を起点として、三つの方向に帯状に広がっています。

まず、地理的距離から説明します。普通、配偶者やパートナーとは、母語や使用言語が同じです。国際結婚の場合も、お互いの母語や英語で生活している夫婦がたくさんいます。

では、家から外に出てみると、近所、同じ町内会、学区の人どうしても、普通は母語が同じです。それから、少し遠出して旅行してみても、市町村、都道府県、国までは、母語が同じ地域です。今日の会場のある大塚は豊島区ですが、このあたりでは皆豊島語をしゃべっているのに、板橋区に行ったら板橋語だったということはないです。

なぜか、自然言語というのは、国ないし州の規模まで必ず拡大して、かつそこで止まるのです。あとは、東京弁と関西弁のような、方言ができるだけです。中国やインドなどの人口爆発を起こした国は、地域ごとに言語が違いますが、それぞれの省や州が世界平均の一国分相当の人口や経済力を有していますので、ほぼ国と見てよいと思います。

例外は、植民地と異国語教育です。こればかりは、政治的戦略や軍事的侵略によって本国の領土を逸脱して拡大するので、政治的距離、軍事的距離という概念も書いておいたわけです。異国語教育の中でも、英語教育は地球レベルです。しかし、基本的に自然言語は、国や州レベルでとどまり、ヨーロッパ語やアジア語、地球語、太陽系語、銀河系語、宇宙語などというものはありません。

次に、血縁的・生物学的距離です。配偶者は普通、血縁関係にありませんから地理的距離に含めましたが、親子・兄弟姉妹といった血縁者も、普通母語は同じです。法律上で「～親等」と呼称されている範囲の親族もそうです。100親等のような遠いレベルを含まない限り、遠戚・祖先も母語は同じだし、民族レベルでそうです。

しかし、自然言語というのは、民族レベルにまでは確実に拡大するのに、それ以上は拡大しません。白人語や黒人語、人類語という言語はありません。いくら血縁関係だからと言っても、霊長類語、類人猿語、サル語もないし、哺乳類語、動物語、生物語や、遠い血縁関係にあるかもしれない宇宙人と共通の宇宙語もないのです。だから、自然言語が民族という単位が好きなのは、自然の摂理なのです。

ところが、一番下の帯、特に現代の心理的・社会的距離となると、面白いことが起きます。まず、仲のよい家族・親族が一つの母語・自然言語で構成されているとは限りません。それから、友人や同僚という概念は、母語が違ってても成立します。心の距離感が難しいビジネスパートナーも、母語が違う人どうしが一応は英語で通じ合っているにすぎない状態です。

ところが、多くの日本人どうしというのは、母語が同じでありながら赤の他人です。外国人の友達よりも遠い赤の他人です。

もっと心の離れた、ケンカした友達やパワハラしてくる上司、絶縁した家族とも、日本語が通じます。お互いに絶縁している間に、豊島語と板橋語に分かれていたなんてことはありません。極端に心理的距離が遠い日本人、例えば、自分を虐待した親、犯罪の加害者なども、同じ日本語をしゃべっています。

むしろ、同じ言語をしゃべっているから、暴言の内容が通じたり、詐欺が成立したりするとも言え、自然言語は恐ろしいことに、その母語話者間の心理的・社会的連帯に反比例する力を同時に持っています。個人間の致命的な対立関係は、同母語話者間でも起きます。一方、全く違う自然言語を持つ国どうしが、高度な同盟を結ぶことができます。

次のページです。今の図から、自然言語の自然な限界、いわば自然言語の「意志」をまとめてみましょう。

まず、自然言語は、地理的には、国家や州単位以上でも以下でもない規模にとどまる。それから、自然言語は、血縁的には、民族単位以上でも以下でもない規模にとどまる。そして、自然言語は、人間の心のつながりには無頓着で、しばしば逆行するかのようふるまう、ということです。自然言語は、人間の心理よりも地縁・血縁を選び取る、ということです。

面白い例として、皆さんにも、他の日本人には通用しない家族ルール、マイ（自分）ルール、人に言えないこだわりなどがあると思います。

私が今まで出会ったものとしては、「ウチでは皆、トイレの扉を開けっぱなしで用を足す」、「我が家では車には土足で乗らない」、「大家族のメンバーそれぞれがマイ風呂桶を持っている」といったものです。こういった家族も、標準日本語に対抗して「ばなしぼさらす」、「どさらばさらさない」、「まいおっける」などという新たな動詞を作るといった、「家族語」を作る行動には出ないわけです。

それから、文法の変異についても、地縁・血縁を無視した個別の変異は起きません。動詞の連用形がない家庭、ク活用形容詞が使用禁止の大学、英文に三単現のsを付けない会社、なども存在しないですね。

それに、しばしば日本語の乱れということが言われますね。「答えが違くて」、「私はあの人の人みたくになりたい」、「あの人が好きくない」などと言う人が最近増えてきました。文法的

解説は省きますが、これらは確かに文法の逸脱で、私はこれらを「三大変則ク活用」と呼んでいます。言語・日本語を事細かに研究している私個人から見れば、こういった文法を使っている人を疑問に思うのですが、言語学的には、こういった文法の変異は、家族・友人どうしの会話ではなく、必ず民族語単位で起きます。

つまり、こういった変異は、家族愛や友情といった個人レベルや小規模グループの会話における心理とは無関係の現象で、どこかの一人の高校生が使い始めたのだとしても、すぐに普及するため、最初の人物の特定は不可能ですし、存在しないかもしれません。今挙げた三つの変異は、極めて短期間に大規模に普及しており、国語辞典に載る可能性もあります。

ここまで、自然言語は心のつながりよりも地縁や血縁を大事にするという皮肉のような現実を述べてきましたが、さらに言うと、その下にある通り、自然言語は、最終的には地縁・祖国よりも血縁・民族を選ぶのです。

例えば、クルド語・クルド人はトルコなどから弾圧を受けてきましたが、クルド語は今もクルド人の民族言語として成立しています。国はなくても自然言語は民族語として存続するという例です。

アメリカ英語を中心とするいわゆる「英語帝国主義」や、中国の共産主義的言語政策による普通話、つまり、北京語・官話に基づく公用語の強大化の懸念など、色んな言語学上の人気のテーマがあるのですが、いくら大国が言語侵略をやっても頓挫し、少なくともインドのように、州ごとの公用語のようなばらつきが残ります。これは、自然言語が国境よりも民族の境目を選択することを示しています。

スイスやベルギーについても、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロマンシュ語、フラマン語などが入り乱れていて、自然言語の境界線は、国境線、つまり政治的・軍事的境界とは無関係で、ほぼ民族の居住地域の境界線です。

朝鮮語と朝鮮人、ヴェトナム語とヴェトナム人、ドイツ語とドイツ人など、南北や東西に分断された経験のある民族も、方言の違いはあれど、一つの民族語を維持しています。同一民族が異なる国家や政治体制に分断されても、自然言語は分裂しないという例です。

トルコの初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルクのトルコ語純化運動や、李氏朝鮮の国王世宗のハングル普及策の訓民正音に見るように、むしろ国語純化運動・異国語排斥運動、文字の普及政策は、国家への帰属意識を強制すると失敗するのに、民族精神を鼓舞すると成功するのです。

このように、自然言語の「意志」は、作為的な土地のつながりよりも生物学的な血のつながりを選び取るわけで、自然言語は多分に生物学的・生態学的現象であることが分かります。

それにもかかわらず、我々人間が社会で自然言語を使っているのは、テキストにも書いた通り、地理的・血縁的距離に関係なく自分の意志が言葉で人に伝わると信じたり、心を言葉で伝えたいと思っているからですよね。

それを人一倍信じる作家たちが「国」や「民族」の規模を突破しようと頑張って作ったのが、エスペラントなどの国際補助語です。ある意味では、自然の法則への挑戦状です。

でもこれは、帝国植民地主義時代、世界戦争、冷戦期の平和への渴望が根本にあります。だから、国際補助語は、そもそも民族対立の解消、社会主義・共産主義・無政府主義と親和性があったのです。それぞれの母語を壊さずに第二言語としてのみ用いる方針のものもありましたが、言語の世界統一の可能性は、程度の差こそあれ、多くの国際補助語の作者が考えたことでした。

そういうわけで、国際補助語には大言壮語的・全体主義的なネーミングが多いですが、当初の理念は崇高・貴重と言えます。ユーロパイオ（ヨーロッパ語）、地球語、地球同語、グロービッシュ（全球語）など、あまりにも実現不可能な規模のネーミングですね。

このような、自然言語の自然法則に反してまで究極の理想を目指した国際補助語の創設計画は、人工言語以外の一般の言語学者や作家にも影響しました。

よく考えてみると、日本での先駆者には、宮沢賢治がいますね。何と言っても「銀河鉄道」ですから。宇宙意志とか、地球市民（コスモポリタニズム）といった壮大な思想を持ち、岩手をエスペラント風に「イーハトーブ」と名付けていました。

しかし、現在の世界の構図は、国連、EU、環境保護、宇宙船地球号といった「世界の人々の心の統一思想」と、テロ、紛争、領土問題といった「世界の人々どうしの争い」とが併存しています。

日本国内を見ても、日本国と日本国民統合の象徴としての天皇、憲法、東京オリンピック・パラリンピック、日本文化、おもてなしといった「日本人の心の統一思想」があるかと思えば、過労死・過労自殺、ハラスメント、虐待、いじめ、世代間格差、受験戦争、就活・婚活競争、障害者殺害、震災被災者・避難者への差別のように「日本人どうしの争い」があります。

岩崎式日本語は、「国際補助語で国際平和を目指す」思想とはまた別のレールを走る試みだと思っていて、テキストにも書きましたが、「一部の日本人のために作る」、「本当に必要な人には直接教授する」、ただし、「母語を否定・破壊せず、利用する」、という言語ですね。文法解説書はサイトに掲載していますが、その先は個別に教えるという状況です。

特に、自分と相容れることが絶望的である日本人、例えば、暴力被害者から見た加害者などに非暴力的に対応できるような人工言語を生み出したいという願いを、私はずっと持ってきました。いわば「穏健で知的な攪乱作戦」と言えるでしょうね。

未知の言語世界を持つ被害者は、加害者から見ても恐怖・不安でしょうし、殺伐とした社会にあって、法律、警察、公権力、刑罰、監視カメラなどとは別種の知的で芸術的な抑止力になると思います。

今回は、「自然言語の法則、人工言語の挑戦」というお話でした。どうもありがとうございました。

第4回テーマ 人工言語を通して見る社会

最終回のテーマは、「人工言語を通して見る社会」です。

先ほど、岩崎式日本語のコミュニティはかなり閉鎖的であるというお話をしました。DV被害者や精神障害者・言語障害者の個人宅や、避難シェルター、閉鎖的なシェアハウスなどの施設内部での使用、姉妹・友人どうしでの使用が、それに当たります。

ブログやSNSを持つこともなく、交換日記・交換ノートやメールでのやり取りに終始していますが、これに関連して、国家の内部にある言語共同体、ないし芸術集団・思想団体が持つ心地よさと危うさについて、人工言語の視点から語ってみたいと思います。

2013年5月に、人工言語界全体を揺るがす事件が起きました。伊勢原女性刺傷事件です。日本で最も著名な、私より一つ年上の人工言語の作者の男が、協力者でもあった元妻を、探偵を使って探し出し、神奈川県伊勢原市の路上で切りつけ、殺人未遂容疑で逮捕、有罪となった事件です。被害女性は、意識不明の重体となり、意識が戻った後も重いトラウマを抱えておられます。

警察の不祥事も問題となった事件です。被害女性は、不審な自転車が駐輪されていると訴えていて、担当警官は、加害者と探偵が置いたカメラ付きの自転車だと突き止めていました。そのことを被害女性に伝えていないのに、「女性に電話したら出なかった」と、上司に虚偽の報告をしていました。

被害女性は、以前からDVシェルターを中心に避難生活をしていました。岩崎式日本語の使用者の方々と同じです。岩崎も、この犯人と言語学上の議論・交流があり、衝撃を覚えました。

犯人は、大学で言語学を専攻していました。元妻を含む女性たちや実子、ファン、創作物語の登場人物たちを含めた壮大な世界、文明、歴史、暦法、地図、映像、ゲームなどを創作、公開しており、日本の多くの人工言語愛好家の目標、カリスマ的存在でした。

当該言語は、実用に耐えうるもので、被害女性はこの言語での生活を実践し、辞書編集、教材の作成などに携わったのち、犯人と離婚しています。

興味深いのは、犯人についてのテレビ・新聞報道・週刊誌での扱いとネット上・人工言語界隈・サブカルチャーでの扱いが対照的だったことです。テレビなどでは、おおむね「自作言語という怪しい趣味を持つ自己愛的なストーリー・発達障害者」という扱い、ネット上や人工言語界では「衝撃はあっても冷静に研究すべき対象」といった扱いが多かったです。

岩崎式日本語は、私の実名で制作していますし、この被害女性のような人たちの知的な

安住の場を想定して作っていることを公表しているため、それについてマスメディアから取材依頼が来ました。多くの日本の人工言語作者は、自分で自分にアニメキャラクター風の名前を付けており、私からは、そういったサブカルチャー系の人工言語への批判的なコメントが欲しかったようでした。

しかし、取材を辞退しているうちに、次第にマスメディアからの依頼はなくなり、テレビ報道も、比較的早く沈静化しました。それには、マスメディアが、犯人が展開する人工言語学を理解できなかつたことも挙げられると思います。NPOや女性人権団体も、少しは動いて、「おかしい人工言語に騙されるな」といった忠告を女性向けに出したのですが、動けるのはDV被害の問題の部分だけで、この犯人の高度に言語学的な頭脳を目の当たりにしたときには、あまり対応ができていないようでした。

ただし、私の言語までもが同類だと思われるのは心外だったので、しばらく活動自粛しました。正確には、私が自粛したというよりは、似た境遇の被害女性たちが、疲労や恐怖を覚えたりフラッシュバックを起こしたために、より猜疑心・閉鎖性・秘密傾向を帯びることになったということです。

だから、言語を作っている事実と、文法解説は私がウェブ上に掲載していますが、被害女性たちは岩崎式日本語で書いた日記や被害記録などは各自のブログやSNSでは公開せず、ご自宅や寮の部屋にしまい込んでしまいましたし、私に預ける場合も、使用者のほうから厳しい条件を付けて預けてくるようになりました。手書きのものは、筆跡で元妻や元恋人が分かってしまうので、公開は難しいです。

岩崎式日本語の使用のスタートの仕方としてよくあるのが、施設内の一人が、冷蔵庫に貼る買い物の備忘録、机のメモなどに使用するパターンです。ルームメイト・寮生どうしでは使用しますが、それ以上公言はしないから、外には漏れ出ないのです。一時期は、「この被害女性が自分たちの施設に来てくれればよいのに」、といった意見まで出ました。岩崎式日本語の制作の事実や文法のウェブ公開や講演活動をやめてほしいというような意見が、今もあります。しかし、そこだけは譲ってもらっています。使用者の日記、被害記録などの隠蔽がきちんとなされていれば、それでよいと考えています。

こうして、取材依頼よりも、事件や報道を見た使用者の恐怖の再燃やフラッシュバックなど、心の面での事件の余波のほうに、私は長く付き合うことになりました。

しかし本当は、この犯人が大学の卒論で人工言語について書いたときに、教授から叱られたり友人たちから笑われたりする中、被害女性だけが犯人の芸術を認めて支えた人間だったこと、そして結局は犯人の元を去ったことに、重要な点があると思います。

私も、人工言語を作っていることが同僚や知人に知られたらどうしようといった不安と闘ってきましたから、その苦しみだけは分かります。これについては、以前関根さんが、絵画や彫刻や建築のような「手で触ることの出来る素材や目に見える形」ではない言葉の世界を美術で扱うということで「なかなか共感してくれる教授もいませんでした」、と書いていたのを思い出します。

事件後、人間の心の安住の地、理想郷とは何か、芸術・学問とは何かを改めて考えました。自分の作品にファン・パトロン・協力者がついたとき、去ってしまったとき、芸術家・制作者はどうあるべきか、あるいは、協力者は芸術家・制作者にどう接するべきか、そう言ったことも考えました。

制作者と協力者の双方が、ある人工言語や芸術作品の世界観・哲学を、どうしても相容れない加害者などの人間への知的な抵抗運動としてのみ使用しているうちは、大丈夫だと思います。一方で、その言語や作品や思想が世の全てであり、これを中心とする共同体やユートピアを建設するのだといった発想になると、反社会性を帯びてくると思うのです。

こういった被害者が共同生活する施設では、みんなが吃音や寡黙だったり PTSD だったりするから、心の面では安心なのですが、こういう事件のニュースを、怖いからみんなで見ないわけですか。そうすると、これはまずい、もっと連帯しなければという気持ちになってきて、そんな時に、別の新しい言語や芸術、宗教が目前にあると、それが救済者に見えてきて、人間は我を失いがちなのです。

岩崎式日本語をめぐるでも、色々な声が聞かれました。つまり、犯人に対抗できるのは岩崎さんしかいない、岩崎式日本語が世界を救うんだ、といった意見が出たかと思えば、岩崎さんも自分たちに犯人と同じことをするのではないか、という不安の声まで聞かれたということです。ただ、こういった極端な考え方は、やはり私が目指す方向性とは全く異なるわけです。

この事件は、人間の共同体や芸術家の理想郷のあり方、皆さんが出くわす社会問題への対応の一つのヒントとなると思ったので、お話ししました。

元夫や親族といった加害者だけでなく、警察やNPO、人権団体も信用できないというような被害者どうしの精神的連帯として、社会全体に対する報復的・排他的な態度に出る代わりに、こういう人工言語のパワーや芸術力というようなものが加害者を「あっ」と言わせるのに有効かどうか、再犯の抑止力があるかどうかを、私は自分の人工言語で探究したいと思っています。

加害者は、もはや法律や警察や人権団体が怖くないわけです。でも、被害者が何だかわけの分からない人工言語で被害体験を記録していて、かつそれが、おかしい宗教教義ではなく、言語学や哲学、精神病理学に裏付けられた言語であるとなれば、法律、刑罰、人権の主張、監視カメラなどとは別の効果があるだろうと思うのです。

こうしてみると、テキストにも書いた通り、人工言語が肥大化・宗教化しないように努めることは、作者としての責務なのだろうと思います。しかし、そもそも人工言語を基盤に据えたところで、そういう宗教的・思想的な理想郷・共同体は、現実には成立する可能性が極めて低いのです。

過去の史実として、無差別殺人などの重大事件を引き起こした宗教・思想団体や国家などのうち、自国民の虐殺や自国の破壊は行っても、自分の母語を破壊して新たな人工言語に乗り換えた人物や集団は存在していません。

結論は一つで、自分たちが困るからです。教団や国の外での生活ができなくなる、教義や国是の宣伝・布教ができなくなる、単語・文法・辞書の制作に膨大な労力と時間と頭脳が必要だ、結局は母語で国民を洗脳・マインドコントロールした方が早い、自分たちが英語などの外国語を学ぶ方がまだ楽だ、など、いくらでも理由が挙げられます。すなわち、人工言語は割に合わないのです。

その下に、色々な例を列挙してみました。

日本国の憲法や法律が適用されるはずの土地で新国家樹立を狙った宗教団体の例としては、オウム真理教が挙げられます。公安当局や監視団体が公表しているオウム真理教の活動を見てみたところ、化学兵器・生物兵器の製造、国民の無差別殺戮、国会襲撃計画、天皇制打倒、神聖法皇としての教祖を頂点とする新国家建設計画、省庁制・軍隊・放送局・出版社・オーケストラの整備、ロシアへの進出などがあり、半分くらいは実行しました。今も公安当局が複数の後継団体を監視中です。ところが、日本語の破壊計画や教団語の創設・公用語化計画は見当たらないのです。オウム国家の言葉は日本語なのです。

当時の幹部には、東大、京大、早大、慶大、阪大などの一流大学卒の宗教家、法律家・弁護士、医者、理・工・化学者などのエリートがいました。末端信者は、教師、会社員、OL、主婦、学生、犯罪被害者、DV被害者、発達障害者、パーソナリティ障害者などです。これほどの頭脳と、日本社会から外された人たちが結集していれば、新しい言語の開発が行われてもおかしくなかったはずですが、そうはなりませんでした。

IS（イスラム国）も、国を名乗るなら公用語を自作すればよいものを、他のイスラム教徒たちと同じアラビア語を採用しています。しかも、敵国語であるはずの英語でも思想をネット配信しています。

それから、カンボジアにポル・ポト派という勢力がいて、自国民に対する虐殺を行い、宗教・学校・病院・貨幣・科学など、あらゆる文明概念を否定し破壊したのですが、カンボジア語（クメール語）だけは維持したのです。原始共産制を目指しておきながら、故郷や自国語にこだわるというのは、私としては矛盾だと考えます。本来、最も急進的な原始共産主義者というのは、最終的には家族や故郷や宗教や国家という概念を捨てるからです。

ヴェトナム語の場合、フランスのヴェトナム支配から戦後にかけて、文字が漢字表記から「クオック・ゲー（國語）」と呼ばれるアルファベット表記になったわけですが、ヴェトナム語は壊滅しませんでした。当初は、フランスが「贈り物」と称してアルファベット表記を強制したのですが、ヴェトナム人知識層が上手に受け入れたため、ヴェトナム語の根幹が壊れないように定着したのです。ヴェトナム戦争の際も、そういった民族精神がヴェトナム語を守ったと言えます。

それから、日本の例で言いますと、連合赤軍は、あさま山荘事件で鉄球がぶつけられるシーンが有名ですが、彼らは、「総括」と呼ばれる仲間・親族どうしの集団リンチ殺人を行っていました。日本人の仲間どうしで憎悪し合う集団であるにもかかわらず、最後まで日本語でケンカしているのです。

日本赤軍も、世界中でドバイ日航機ハイジャック事件やクアラルンプール事件、ダッカ日航機ハイジャック事件など、色々なゲリラ・テロ事件を起こし、世界革命を狙います。でも、どこを調べても、日本語の破壊計画や日本赤軍語の創設計画は出てこないのです。

日本語をしゃべりながら世界革命を起こそうという発想自体が暴論であることは、今の海外における日本人殺害事件を見ても分かりますが、知的なはずの日本の新左翼でさえ、母国の日本語にすがるのである。人を殺しておきながら、自分の日本語を捨てるのが怖いというのは、利己的な思想だなと思います。あれで究極の原始共産制が到来するものかと、私は思ってしまいました。あの時に、戦後の日本語を捨て、連合赤軍語や日本赤軍語を自作して叫ぶという発想は、彼らにはなかったわけです。

今でも思い出しますが、私がまだ東京大学に在籍中だった 2001 年 8 月に、駒場寮という学生寮が立ち退きの強制執行に遭って廃寮となりました。その時もまだ新左翼系の学生がいて、学生の自治を叫んでいたのですが、全員が全員、日本語で書かれた法律や公権力に日本語で対抗しているわけです。そもそも、旧態依然とした権力に対抗するというのが、左翼勢力の大義名分だったはずなのです。誰か一人くらい、駒場語を開発する人がいてよさそうなものなのに、いなかったです。

最近では、韓国が北朝鮮に向かって拡声器で宣伝放送をしていますね。もし金正恩が正恩語でも作って北朝鮮国民に教育したら、周辺諸国もお手上げですが、北朝鮮の言語は相変わらず朝鮮語だから、宣伝放送の効果は一応あるわけです。

要するに、今述べてきた例は全て、母語や自然言語のとてつもない力、生物学的特性と、人工言語、特に国際補助語の原理的な限界が表れている例なのです。母語というのは、極左共産主義者やアナキスト（無政府主義者）でさえすがりついて離さないもの、染みついたホクロや絶対に生えてくる髪の毛や爪みたいなものなのです。極左思想でさえそうなのだから、そもそも日本語・国語にこだわる日本の極右・保守系団体の場合、漢字の旧字体がすらすらと書けたり古語で街宣活動をしたりしなければ、思想的に矛盾していると私は思うタイプです。

どんな革命集団も、自分の民族語を捨てたら終わりだということを、細胞レベルでは知っているのです。ある意味では、国際補助語を作ろうとしている人工言語作者というのは、テロリストでさえ本能的に避けていることをやろうとしているわけです。今でも、国際補助語の作者や使用者、英語以外の言語の順次廃止を主張する英語帝国主義者、カナモジカイのような漢字廃止論者に対しては、極左共産主義者でさえ怖がっていたりします。

裏を返せば、ある民族や国家を破壊しようと思ったら、侵略戦争を起こさずとも、母語

を奪ってしまえばその民族や国家は壊滅的になる、ということでもあります。

自然言語の歴史に反する形で自ら独自言語を採用した集団は、ほぼ全て失敗し、断念・放棄しています。その意味では、ユダヤ教、ユダヤ人ないしイスラエルとヘブライ語の関係だけは、人類史上特殊です。先ほども説明しましたが、ヘブライ語は自然言語とも人工言語とも言えます。エリエゼル・ベン・イエフダーという人が二千年ぶりのヘブライ語復活の立役者で、その息子が現代ヘブライ語の初めての母語話者となり、一気にイスラエルの公用語・国民語となりました。

でもそれは、10年や100年程度の歴史しかない新宗教や政治集団とは比較にならない歴史を持つからで、最初から復活の気運や民族精神の充満がその土地になれば、古代言語の復活はあり得ません。

先ほどの事件の犯人も、自らの人工言語世界で革命理論を展開していました。この犯人は、私と同じく、エスペラント作者のザメンホフの西洋言語への偏重傾向には疑問で、エリエゼル・ベン・イエフダーの精神を評価しているのですが、そういう言語観を持ちながら女性への暴力思想に向かう方向性は、私には分かりませんでした。

そういうわけで、私としては、自分たちの母語の破壊がテーゼにない共産主義思想や宗教思想はかえって疑問だ、不徹底だという考えを持っているのですが、いざ破壊しようとしたところで、自然言語はへこたれずに強靱に残るわけです。

私が言いたいのは、自分の母語・自然言語への不敬や冒瀆は、神や仏へのそれに近いのだということです。岩崎式日本語も、母語である日本語に対する敬意、礼儀を持った上で取り組んでいくべきだと考えています。私の場合は、特に古典、その中でも和歌に親しんでおり、自分でも和歌を詠んでいます。

テキストの最後にも記しましたが、自然言語の力を前に、自分一人の身の程、身の丈を知って生きるということが、大切だと思います。私が目指す言語・芸術共同体、望む社会とは、自分の故郷の母語・自然言語や文化への敬意を基盤とし、他の言語や文化への敬意も同時に伴っている生き方を実践している個人が集まった共同体なのだ改めて思います。

一個人によって創造された世界、言語、思想、宗教などはどこまで肥大化できるのか、肥大化してよいのか、どこまでが安全でどこからが危険なのか、これは人間の永遠のテーマです。

最終回は、「人工言語を通して見る社会」というお話でした。どうもありがとうございました。

岩崎純一による発表部分の配布テキスト（全四回共通テーマ）

岩崎純一による発表部分の配布テキスト（第一回テーマ）

岩崎純一による発表部分の配布テキスト（第二回テーマ）

岩崎純一による発表部分の配布テキスト（第三回テーマ）

岩崎純一による発表部分の配布テキスト（第四回テーマ）

二〇一七年一月十五日 岩崎が起筆

二〇一七年三月三十日 関根ひかりが攷筆

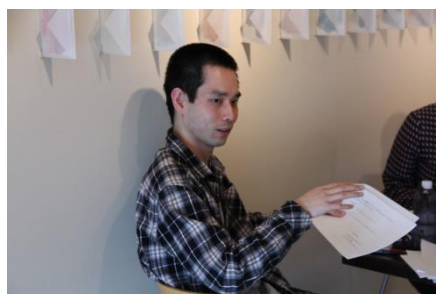
二〇一七年六月八日 公開

別添資料を見よ。

四月二日・九日の発表の文字記録、配付資料を掲載しました

二〇一七年六月八日 起筆、攷筆、公開

（二〇一八年七月十五日追記…現在、リンク先の岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）



お久しぶりです。かなり多忙のため、サイトやブログの更新が全
くできていませんでした。まだ多忙の日々は続く予定ですが。

ひとまず、四月二日・九日のトーク・イベント（関根ひかりさん
の個展内）について、私の発表部分の文字記録、配付資料の部を全
て掲載しました。写真も何枚か掲載しました。当日は、所用や体調
の悪化でお越しいただけなかった方々もいらっしやいましたので、
ぜひご覧いただければと思います。

● <http://iwasakijunichi.net/kenkyukai.html>（文字記録、配付資料）

● <http://iwasakijunichi.net/joho/jimbun.html#jimbun2017>（活動年
表のページ）

● <http://iwasaki.conlang.com/sekinehikari-koten.html>（岩崎式日本語の特設サイト内のページ）

また、関根ひかりさんの「Lesson」という映像作品に参加しましたので、下記のページで紹介しています。関根さんの個展でも展示（ループ再生）されました。

● <http://iwasakijunichi.net/joho/fields.html#art>